253

281

始

13丸
1
工3T5
253-281

西晋一郎著

教育と道德

東京 大村書店刊行

大正
12.12.28
内交

序

本書は教育に關する卑見を近來一二の雜誌に載せたものを略ぼ順序を立てて編したものである。全篇の主意は教育とは嚴密に言へば道德教育であることを明かにせんとするにあるが、其中自ら現代教育に對する批評幷に現代文明に對する批評及び吾人の取るべしと思ふ教育の方向の論がある。

大正十二年十一月

西晋一郎

目次

序論　道德教育卽教育……一
一　教育の意義……二三
二　教育の作用……三一
三　道德教育（其一）……五五
四　道德教育（其二）……七九
五　訓育に就いて……九一
六　人道的教育……九五
七　人道的教育と國家的教育……一一八
八　國民教育の方向……一三五
九　國民教育卽人間教育……一六七

一〇　現代と老子の柔の教……一八七
一一　教育の理想……二〇九
一二　兒童の教育について……二二九
一三　音讀及問答法について……二四六

教育と道德

西晋一郎

序論

道德教育即教育

文化は國民の歷史的國家的生活と諸國民の國際的交通の裡に行はれるから文化を傳達するものは此等の生活及び交通を組織する制度全體であるが、中に就いて此傳達作用の中心となるものは教育である。文化卽ち精神的生活の全內容は暫く之を所謂正德利用厚生の三事に約することが出來る。

利用とは天然を開拓して吾人の幸福に資するやうに利用することで、廣汎精密なる智識技能は之がために作用らくのである。厚生とは卽ち生活を幸福にすることで、利用の道によつて得た物質と富とを萬人に適宜に按配配當して各々をして其所を得其生を遂げしめるやうに處置することである。而して經濟政治法律によつて是が行はれるのである。厚生は固より利用を豫想するものであり、從て又利用の上に立つて之を統一するものである。厚生なければ利用も眞の利用とならぬ。然れどもかゝる厚生の道は何を根據としてをるかといへば言ふまでもなく只正義の精神道德の觀念が主人となつて上に立つてをる。故に正德が主とならねば厚生は妥協悧巧の術に墮し、厚生の道行はれねば利用は徒に弱肉强食の資となる。故に正德が人生を全くする究竟の道である。且つ正德は厚生利用

を全くする道卽ち手段方法であつて人生の正味とする幸福は厚生利用であるといふのでは決して無い。最上統一の地位に立つものは方便手段ではなく實に正味實質である。正德が厚生に透徹し利用的動作を左右し、かくて利用厚生は只これ正德を象徵するに過ぎぬといふに至て、始て文化であり人生である。さもなければ利用厚生は畢竟飽食暖食逸居に外ならず、人生に値ひするほどの幸福とは言はれぬ。これは必ずしも衣食の外に別に精神的生活ありといふのではない。身體を離れた精神は人生ではない。しかしながら農耕に勞する者或は苗の秀づることそのことを樂しみ或は其收穫とする所を以て父母に奉じ妻子を養ひ神佛に供し賓客鄕黨に頒つといふ心無く、只己の口腹の欲を充たすためにするならば、たとひ耕作の智識技能勝れたりとも禽獸の爪牙を以て餌を取ると其の本質に

於て擇ぶ所がない。衣は只己の身の寒さを防ぎ輕暖を貪り或は服人よりも美なるを誇るのみであつて、寒へたる者を暖め老者には帛を衣せ或は禮意を表し體面を保ち社交を整へるの意がなければ、羽毛鱗介の其身を蔽ふと異なる所はなく、織縫の技巧も只卑しき情を滿足せしむる道具たるに過ぎぬ。凡そ食すること着ること棲むことと交ることそれ自身が精神的意義を宿さねば禽獸の其等の生活と其主意目的に於て少しも違つた所は無い、只其等を充たす道具立てや品物の相違あるのみである。美食するは肉體の滿足に過ぎないが、其肉體的滿足を老人に與へたいといふ所に精神的價値が生ずる。或は財寶を欲するは只の人欲であるが、其の人欲を皆のものに途げさせたいと念じて社會を富まさんとする努力に精神的意義がある。我身を大事にするは一つなれど生命保存欲からすると一家に對す

る責任の感からするとに人畜の別が起る。尙ほ進んで老者を滿足させたいといふ如き心を人にも起こさせたい、或は一鄕を富ましたいといふ如き心を或は只親のために我身を大事にするといふやうな心を人にも起こさせたいといふことなれば、精神的價値はいよいよ大となつて來る。すべて如何なる精神的價値も押しつむれば身體的生活に宿る外はない。その如く又如何に豐富なる衣食住の設備も敏速輕快なる交通機關も乃至行屆いた醫療衛生も、若し感謝同情慈愛親切或は尊敬辭讓謹愼或は羞惡廉恥正直義勇忠實或は感慨歎美等種々樣々の心の有樣の表現であり又そのやうな心を養ふためのものでなければ、其眼目目的に於ては身體的滿足の追求の外更に何物もない。從て又如上の生活施設を齎らすために必要なる一切の人間的情操を主人とするのでなければ身體に奉仕する奴僕に

過ぎぬわけである。只そればかりでなく右の情操德義を欠かば夫の智識技能は生物界に於ける弱肉强食よりも遙かに恐るべく惡むべき鬪爭の武器となり、夫の豐富なる生活上の設備は嫉妬怨恨憎惡忿怒の赴く焦點となり、禽獸界にも見るべからざる慘毒を流すのである。固より此等の智能才力を或は豐富なる生活設備のために或は優勝劣敗的競爭の上に作用かすこと其事に一種の快感は覺えられるであらう、實に此快感が自然の餌となつて人は動いてをる場合が多い。しかしこれも道德人情上の滿足を其の背景としてをるのでなければ單に己れの智識才能に驅使せられてをるのであつて、其の主人であるのではない。尙上來述べた議論も此等の智識才能が人間に現にあるを豫想してのことであつて、此等のものが人間に起つた由來を尋ねると却て道德を豫想してをるのである。正德の根

柢の上に建てられた社會組織の裡なればこそ一切の科學智識技術才能が發達するのである。其の母を忘れて徒に其子の價値を議するは既に其順序を誤つてをる。して見れば田畝の勞働は感謝の現れであり、工場機械の運轉も電車汽船の疾走も忠恕同情の流行であつて、始て此等に文化の價値が生ずる。

厚生の道に至ては猶更正德の生活を豫想してをる。奢侈逸樂にのみ用ひられる物資と富とならば之を成るべく多く成るべく適當に分配せんとする正義の行政は成るべく多くの人に成るべく多く奢侈墮落の資を供する機關となり了る。生命財產を保護せんとする司法も人命を全うせんとする衛生醫療の行政も徒に物質と其を充たすべき手段とを保全する道具立である。智識技術を習得せしめんとする敎育行政も生物的生存競爭の武器を供給する施設とな

つて了ふ。財を生ずるに長けたる財政的才能も身體に奉仕する奴僕たるに止まるわけである。富は善に使用せられると豫想して富の分配につき正義といふこともある。しかし正德の本が立たねば富は惡にも使用せられるが、害毒物を公平に分配するといふは矛盾である、公平とは既に善を豫想してをる。經濟は道德を前提として始て意味がある。而して以上のことよりも更に肝要なることは、かゝる經濟行政司法などの厚生的行動そのものが正義道德の精神から出て來るのでなければならぬ、さもなければ官廳の執務も社會政策の研究實行も當人の心底には自己保存欲に奉仕するの外何物もない、或は智慮才能を作用かす上に覺える本能的滿足に驅使せられてをるに過ぎぬ。しかし如上の議論も經濟行政司法教育等諸の厚生の道の現存を前提として其の價値如何を議し、其が道德人情の保

全流布の爲に役立ち且其自身が道德人情からの表現でなければ眞に人生に値いするものでないといふのであつて、若し此等厚生の道は何に由つて起り來つたかを考究するときは、却て道德正義を其根據としてをるのである。妥協とか利害の打算とか利益の交換とかいふ如きが厚生の道の起る動機であると思ふは只表面的の觀察であつて、實に正義慈愛の深い根から經濟も行政も法律も起つてをると見る外眞の說明はない、只從事する個人個人が一々之を自覺するまでに至らぬのである。して見れば此等厚生の術は正德のために役立つて始て價値ありと云ふが既に順序を誤つた論であつて、正德が厚生の母である。

自然的生活と區別して文化といふ中には道德以外に學問藝術宗教があつて、此等は道德以外に獨立の領域と人生的價値を有つから

利用厚生の外は正德のみであるとして人生を三事に約するは偏見であるとも思はれる。しかし人生が利用厚生藝術宗教道德學問等の寄せ集めならば人生は無意義である。すべて意義は歸一點があつて始てあるものである。眞善美の價値の陳列は價値の自殺である。統一する所あつて價値といふものが起るのである、唯一の統一點に返照するのが價値判斷である。判斷に統一點が必要である如く生活其物に統一點が必然である。固より學問の起りとして眞理を愛すると云ふ固有の衝動を擧げることが出來るが、眞を愛するとは正直の心である、信であり誠である。人之生也直と言つてある如く人生は元來正直其物である。而して正直、信、誠は實に道德の眞髓そのものである。學問的努力と其滿足喜悅は道德的自足の外何物でもない。又藝術的衝動といふべきもの又は遊戯的衝動など稱せ

られるものが獨立に動いて、未開人の裡にも既に藝術の芽を認められるのであらう。且つ美に接するとき無上の樂しみを覺えるのは人生價値の大なるものと謂はねばならぬ。しかし美醜の根本的二元が對峙するならば惡魔は神と同等の位にあつて世界には統一は無くなり從て世界は元來成立してをらぬ筈である。すべてが本來善であればこそ惡といふ如きことが現はれるのである。美は善惡の世界を忘れしめるとか藝術は道德を超越するとかいふは、美が却て一切が其根本に於て善そのものであり正義慈愛は生の根から直きに現はれ來るのであることを告げてをるのである。美とは人情の外には無い。純粹無垢の人情の表現としてでなければ五色は目を盲ならしめ五音は耳を聾ならしめるものである。內容豐富技術巧妙なる所の藝術も正直慈愛の根から湧き出づる人情の波瀾の象

徴としてゞなければ徒に心を淫蕩に誘ふ妖術に過ぎぬのである。人道正義を除所事に思はしめるやうな結果を齎らす藝術的價値の享樂ならば其は人生を有意義にせずして却て人生を矛盾破壞に導くものである。

藝術を起すものが遊戯衒動であるとしても、其遊ばんとするは卽ち自由ならんとすること、自由界に入らんとするは卽ち正直清淡純粹無垢の本地に還らんとすることに外ならぬ。眞の藝術は期せずして人生の統一的組織たる道德に人を導くのである。期せざるが故に然るを得るのである。爲めにする所あるは美の本質を失はしめる、爲めにする所なき故に爲めになるのである。禮と並べて樂を政敎の具としたのであるが、政敎の具たるを忘れて樂を樂しむから政敎の具ともなるのである。

且つ藝術の興る由來を考ふれば、治水を計り稼穡を敎へ道路を開きて其衣食を安くし、各々其父母妻子を父母妻子となさしめる等極めて原始的なる利用厚生の道德的努力によつて漸く俗に禮あり國に法あるに至り、然る後に大に文物制度が興り來るのである。藝術の如きは寧ろ文物を飾る華と謂ふべきである。道德的人生組織を豫想せずしては美の樂も享け難い。而して藝術が却て又道德文化に貢献するは適々其根本が正直、信、誠の人生の根本そのものであるを證するのである。宗敎の起りも道德人倫の外に自ら別なる深い要求からであつて、生を全ふする道たる道德を超出して生死を一にする境を求めるものとせられてをるが、しかし生と死と二元あつて生が成り立つわけのないのは善惡二元によつて道德が成り立たぬのと同じ理である。して見れば生死を一にする宗敎の境が一切生

の根元であるべく、從て生を全ふする道たる道德は其根柢に於て宗教と相通じなければならぬ。其根元に於てすべてが善であるといふ道德の基礎を其儘に捉へて人間相互の關係から起る善惡の差別を眼中に置かぬ所から宗教が或は道德と矛盾する如き觀を呈することがあつても、其根本に於て兩者は實に深く一體であつて、道德の完成が直に宗教であるのが人生統一の最も順正なる路である。かく考へれば利用厚生の上に只正德の一事のみを冠らせたからとて宗教學問藝術等の他の文化的方面を無視してをるわけではなく、却て正德の一に歸して此等も眞に人生價値たるを得る。若し眞善美の三價値が人生に鼎立して統一する所がなければ天下を三分して各々其一を保つた三國時代に支那の天下の統一が無かつたと同樣に人生は常に破綻の憂慮に脅かされてをるわけで、實は美の樂も安

心も道德も無い筈である。眞善美の價値あることが取りも直さず三者の其根本に於て一であることを告げてをる。プラトーの語を借れば、善のイデアがすべてを統一するのである、美も眞も善が生む所であると見ることが出來る。

文化を正德利用厚生の三事に暫く約し、而して利用厚生は全然正德の象徵であり又正德は利用厚生の實事の上にのみ現はれるとせば、文化傳達の中心的作用たるべき教育の眞意義は道德教育に外ならぬ。道德教育でない教育は眞の教育でないことは正德の象徵そのものでない利用厚生は其の眼目目的に於て生物的生活外に出でぬものであると全然同じ理である。善事にでも惡事にでも用ゐることの出來る身體を强壯にすること自身に如何の意味があるので

あらうか、體育は善を豫想せねば獨立には意味はないやうに思はれる。私欲を遂げるにも、公益を增進するにも等しく役に立つ智識技能を養成すること自身に獨立の價値はないと云ふも可である。智能を善事を爲す上に用ゐるといふ條件の下にのみ智育其他一切の專門的職業的敎育は有意義である。然らば正德を養ふ道德敎育の下に統一せられて智育技術敎育體育は始て敎育といふに値ひするは言ふまでもないことである。今日敎育と稱してをる仕事の殆どすべては人間を利用厚生に役立つ道具に仕立てることである。是は此利器にまで仕立てあげられた人間は此利器を正善の仕事を爲す上に使用する正德の持主であることを前提としてをるに相違ない。さもなければ敎育いよ〳〵盛んにして身體いよ〳〵强健智識技能いよ〳〵精密となり、身體いよ〳〵强健智識技能いよ〳〵精密

にして生存競爭いよ〳〵激烈となり、其執つて以て戰ふ武器の性質こそ異なれ其爭の眼目目的は生物的生活の滿足以外に出でず、而して戰ふ武器の精銳なるだけ戰は却て慘たるものであつて、敎なければ人は最惡の禽獸なりとの語の當れるを覺えしめる。其の爭ふ間は敵慨忿怒憎惡の情燃え、敗れる時は悲痛怨恨嫉妬の情に惱まされ、勝つときは勝心の滿足といふ卑しき感情と、物質肉欲の滿足と、智的才力を作用らかした否智術才力に驅使せられた本能的滿足(其は獵夫が鹿を追ふて山を走ることそのことに伴ふ滿足或は虎が牙を鳴らし爪を怒らして小獸を搏つことそのことに覺える快感と其本能的滿足たる性質に於て些の相違なきものである)とを覺えるまでゝある。感謝同情慈愛親切或は尊敬辭讓恭謙或は羞惡廉恥正直忠實或は感慨歎美讃歎渴仰崇拜等人生を眞に意義あらしめる情操は道

德人情の涵養を豫想せざる百の體育千の智育によつても得られるとは思へない。故に正德によつて充たされない利用厚生に人生的意義なき如く、道德を根柢とせざる體育智育に文化的意義は認められぬ。正德利用厚生が鼎立して人生を成さぬ如くに智育德育體育が鼎立して敎育を成さぬ。眞の人生は只一つであるべき如く眞の敎育は只一つしかない。

しかし如上の議論は又しても正德を餘所にして人生に利用厚生といふことがあるかの如く、又德育と獨立して體育智育といふものが敎育界にあるかの如く假りに見做して、利用厚生乃至體育智育の價値を論じたのであつて、其實は正德が根柢に作用らいてをらねば抑も利用厚生といふことが人生に起りやうが無く、又德育の精神が根柢に動いてをらねば抑も體育智育といふものが敎育界に出現す

る筈がないのである。故に苟も利用厚生の道が開けてをればそのことが既に正德の嚴として立つてをるを證する如く、苟も體育智育の行はれる所德育の精神が其根柢に流れてをるを證する。又正德といふも利用厚生の實事の上に流行する外なく、利用厚生の實生活を餘所にしては正德の宿どるべき所なき如くに、體育智育技術の習得の上に德育は行はれるのであつて、其等の敎育的仕事を餘所にして別に德育だけ行ふといふは空想である。さきには强健なる體力も精密なる智識技能も善惡いづれの方にも使用せられ得ると言つたが、徹頭徹尾眞理の通りには行はれぬ人生にあつては固よりそのやうなことが多くあるなれど、人生の根柢は正德であり生そのものが正直、信、誠であるといふ根本眞理から見れば、健全なる身體そのものは誠であり善である、精密なる智識技術はそのまゝ眞理であり善

である。故に體育智育は其の根本眞相に於ては實に德育自身である。只身體は自らが誠そのものであることを知らぬ。智識技術は自らが信そのもの正德そのものであるを自覺せぬ。此自覺なき故に己れ自身の本來に背き自己を傷ける如き擧に出づるのである。正德が己れを生める母であるを知らぬ利用厚生は正德に背いて利用厚生そのものを傷け、德育が自己の存立根據であることを自覺せない體育智育は德育と己れ等と鼎立して敎育界を三分せる如くに自惚れて、敎育いよ／＼盛にして時勢益々功利に走るといふ如き結果を來たす。して見れば敎育の理を究めるには人生そのものを反省せねばならぬ。人生の反省が道德であるは一般的生の反省が人生自身であるが如きである。故に自然的生活から利用厚生が發するのではなく利用厚生が自然生活の根であり、利用厚生から正德が

發し衣食住足りて禮節を知るのではなく、正德が利用厚生の根であり、禮節を知る故人生に衣食住足るのである。正直、信、誠、慈愛、かくの如く名づけられるものが生の根であり眞の生そのものであると見れば、敎育に於ては德育は固より一切の敎育の根であり眞の敎育そのものである。此の主旨を知つての上ならば體育智育德育と分つも亦必ずしも妨げない。專ら言ふときは德育智育一切敎育皆德育である。而して之をよく知ると否とは敎育の實地に重要なる相違を來たすのである。

然らば德育の要は如何と云へば、曰く反省是なり、鍛錬これなり。反省せずしては鍛錬行はれず、鍛錬せずしては反省は出來ぬ。理性は卽ち意志である。意志の鍛錬を欠く敎育は眞智卽ち理性を發せしめることが出來ず只感性を開放し悟性を鋭くするまでである。

而して悟性とは畢竟感性に奉仕するものである、而して感性的生活とは肉體的生活のことである。只鍛錬の二字を欠くとき百般の教育は擧げて盡く教育の殘骸たるに止まる。若し食欲を制し欠乏を忍び困苦に耐ふる鍛錬を拔きにして只休養と滋養物の吸收によつて健全なる身體を養い得る日の來ることあらば、只感性を開發し鋭敏にし諸種の智識を注入し技術を習得せしむることのみによつて健全なる精神を養い眞の文化を傳達することの出來る時節も到來すべきである。

一、教育の意義

語に曰く信無ければ民立たずと、蓋し信仰といふものゝ無き生活はたとへば身體に骨格無く草木に根無きが如く、回顧して一生の無意義なりしを覺えざるを得ざるべし。固より或は富に據り或は權勢に據り其外學術智能に據るものあらんが、總べて此等は條件的には頼みとなれども眞に堅固なるものとは思はれぬ。或は功業を立てゝ其を頼みにする心が起ることもあらんが、此も畢竟の據所とは考へられぬ。教育に從事するもの先づ以て日常起居動作に如何んの根柢あるかを省みて然る後に教育の仕事の意義も分ることならん。若し語默動靜果して何の根據あるかを察せずして教育につい

て彼是と言ふは只機械となつて運轉し走狗となつて奔走するの類にして、自己が主人となるものにあらず。語に又曰く隨處に主となれば立處皆眞なりと。是れ卽ち信念ある生活のことならん。若し自ら主となれば必然にして易ふべからざるものあるを信じて此所に始て現刹那の生活も或る奪ふべからざるものゝ顯現たる意味生じて、眞に根柢ある生活となるを得べきわけなり。

是れ卽ち古來の敎訓にして吾人の最も當さに究むべき所なり。五尺の小身より出入する一呼一吸も直接に無邊の大空と交渉す。悲喜歡樂忿怒爭鬪の巷にも頭を上ぐれば敵も味方も共に萬古の月を見る。このことは實に吾人の刹那々々の生活の背後は直ぐに永遠の世界ではなきかを思はしめる象徵であるではなからうか。信あれば必ず實行あり、實行に一々意義が充實してをることが願はし

い。世間の事は如何に急用のことであつても之を差し措いて他に向はねばならぬ他の急用事が起り得る性質のものであるが、只瞬時と雖も差し措くといふことの出來ぬものはいづれの急用事に向ふとも踏み違へてはならぬこと恰かも何方へ走るとも大地を踏み外づすことの出來ぬが如きものがなければならぬ。是れ卽ち必然にして易ふべからざるものであつて、是に據つて時々刻々生を營むとき生活に根據ありといふを得べきかと思はれる。水が如何に急いで流れたからとて凹處を飛び越して向ふに流れることは無い如くに、如何に吾人が切望すればとて便宜であればとて、道を踏みはづして目的を攫むわけにはゆかぬ。必然なるものがあればこそ人生に根柢があると謂はねばならぬ。語に又曰く草木國土悉皆成佛と言へり。蓋し獨り人生のみならず一切萬有悉く必然の根柢あり、此意

を推し究めて考ふれば山川草木出現の根柢には倫理的意志がなければならぬ。信が萬物の根本であるといふことに歸着するといふ意味と思はれる。

既に萬物が踏み外づすことの出來ぬ道の顯はれであるとすれば勿論人生も着衣喫飯の日常に至るまで守つて失ふべからざるものがなければならぬ、是は其食すると着ると語ると默するとに通じて然るものであつて、是を離れては根無き草木の如きものであるとせねばならぬ。果して然らば敎育といふ生活にあつてもたとへ其敎授の方法は左右に分れても、其方針は東西に相反しても、又兒童を相手にしても、青年を相手にしても、又歷史を敎へても算術を敎へても手工を習はせても總て其等の相違差別に論なくいづれに向つても踏み外づしてならぬ必然のものがなければならぬ。若し此根本を

失へば如何なる方法も方針も悉く皆根柢なきもの、骨格なき身體の如きもの、卽ち其實身體たるを得ず、其實敎育たるを得ざるものとならねばならぬ。折角の方法も主義も悉く砂上の建築である。故に敎育の根本は卽ち人生の根本、人生の根本は卽ち萬物の根本なりといふ意味を認めんと欲するのである。敎育的仕事の一擧一動皆眞ならんがためには日常內外の語默動靜皆眞でなければならぬ、卽ち立處皆眞とはこのことならん。而して立處皆眞ならんには隨處に主となれよと言つてある。自ら主となるとは自ら信ずる所があることであると謂つてもよいかと思ふ。必然にして易ふべからざるものに撞着せねば故らに任意に信ずるといふことは出來難いと思ふ。最も深い處に立脚すれば日常の些事も皆眞實となる理である。英國のポサンケット博士は萬有の根柢に於て信ずる所ある民族が

世界に於ける最も有爲の民族なりと言つてをらるゝ。所謂物に本末あり事に終始あつて見れば先づ其本を立てねば萬事勞して徒らごとゝなる恐れがある。自信なき生涯は如何程活動しても機械の運轉の類である、如何程所謂成功しても機械の運轉の奏效同前である、畢竟自己を認めぬ。然かも此自信は事物必然の根柢に於てにあらざれば得るわけにはゆかぬ。

或は言はん、人生はさほど六ヶ敷ものであらうか、人生乃至萬有の根柢などゝいふことは凡慮を脱出した所である、さやうのものゝ有無すら確かに知らぬ、其をつきとめたのでなければ生活は根無し草の如しであるなどゝ言ふは餘りに世間を見下げた借越な言分であると言ふ者あらんか。然れども若し必然にして易ふべからざるものを信せざればこれ卽ち懷疑か破壞か夢幻かであつて人生は一向

に眞面目なるものではなくなる。吾人が世の中の務として兎にも角にも勉勵すればこそ吾も人も共にかく生を營むことが出來てをる。放僻邪侈とならざる限りは人生を信じてをるのである。アドラ曰くより良きものは少數者の有であるが最良無上のものは萬人の有であると。語に曰く大道は愚夫愚婦も之に與かり知ることが出來るが其至れる所は聖人と雖も及ばざる所があると。苟くも自己の地位權勢などを恃まず、自己の狹き經驗智識(如何なる人にあつても一個人の經驗智識は偏狹たるを免れぬ)を固執せざれば正直平坦の心地は誰にも固有のものである、是れ卽ち人生の根柢、敎育の根柢の所在でなければならぬことゝ思ふ。固より其至れる所は聖人と雖も達せざる所ありと言つてある。

以上は敎育と人生一般との共通根柢について考へたのであるが

教育の人生に於ける獨特の意義如何と言ふに、思ふに教育とは人生存續の道である。生物一般は繁殖の道に由つて存續する、存續するとは勿論其種を存續することである、他の種に移つたのならば自己は滅亡して他が之に代つたのであつて存續ではない。人生も生物としては繁殖の道によつて其種族を繼續してゆくが、同時に教育によつて其精神を存續するのである、何となれば只繁殖による存續には繼續の自覺がない卽ち眞の連續に達してをらぬ。此故に生活の精髓は精神なりと言はねばならぬ。精神にして始て眞に連續せるもの卽ち眞に活きるものである。活きるとは言ふまでもなく其特質に活きるので、其特性の連續が絶えては自己は消失して他のものが代つて現はれたので、活きるのではない。精神が生活の精髓であるとは精神に於て獨特性が直接態に居るからである。精神の相續

が生存の核心である。故に一切教育の眼目は歴史文化の相續にある。換言すれば國民的精神の相續が一切教育の終局目的であつて、是によつて普遍的人間性が實現せられると思惟せられる。故に國民的教育の外に人間としての教育ありとは思はれぬ。恰かも菊を培養し牡丹を生育する外に別に花を造るといふことなきと同前である。若し尙ほ强いて國民的教育の外に人間としての教育ありと言はゞ、其は互に相代用することも出來る道具としての人的諸能力の養成といふことに外なからう、是も教育の一部分なれども精神の相續卽ち生存の道といふ主意の教育の本意眼目とする所ではなからうと思はれる。

二、教育の作用

すべて作用は因果の範疇に攝取して之を見るときは因果的必然なるもので自由の地がないが、これは一種の見方であつて此見方の對象界は廣い意味の自然的客觀界である。此見方と別に或は此見方を超越して作用を見る時は自由の世界或は創造の世界がある、物界心界ともにさうである。既に物理學も作用のある所必ず反作用あるを認めてをるが、實は反作用の有無に拘らず作用はあり得るのではなく、反作用あるが作用あることである。反作用のない所には作用もない、何等反作用を起さぬ獨一の作用といふものはあり得ない。偖此の反作用は作用に應じて或は作用を成就せしむるとして

此方から働き出づる能動的であつて全然所動的でない受身でないから、一切の作用は實は相互作用である。然るにも拘らず作用と反作用とを區別し且つ此區別の中には幾分の能動所動の別をも含む所以は、元來作用卽相互作用なるものは循環のことであつて、此循環の前歷程は後歷程の理由を含むものと見る所に吾人の認識が成立するものであるから、吾人の認識には前歷程が作用後歷程が反作用と見られるのである。且つ前歷程卽ち作用と後歷程卽ち反作用を分ち見るとき、同時に右の作用及反作用の持主といふ實體概念を構へるのがこれ又吾人認識の性質である。そこで甲實體から出づる作用が乙實體に及んで後者に某の變化を起こすと見て、ここに能動所動並に原因結果の思想が成立する。然るに斯かる概念の働を去つて如實に純粹に經驗するときは只完結せる一作用あるので其所

には彼我無く能所なく、且其作用の極所に於ては前後の別も無くなる。たとへば石が高所から地面に落ち込むとき落下する石の力が因で地面が凹む等の果を起こしたといふのであらうが、地面が凹むこと、地面が或る反動力を石に及ぼすこと、空氣の壓迫震動、此等を除けば落下する石の力の存在は此場合何處にも無いのである。石の落ち初むるより空氣の壓迫、震動、地面の凹むこと、反動力の石に及ぶこと等に至るまで只一と續きの作用であつて、如實には間髪を容れざる一息のものである。所謂果がなければ所謂因も無く、反作用無ければ作用も無い。獨立の因、獨立の作用ありと思ふは他の種々の具體的事變に於て石の落下といふ共通事象を抽象して得たる概念を今の場合に持ち來たして、石の落下といふ獨立の力ありて即ち因であり作用であると思ふのである。然れども今の具體的場合に於

てかかる「石の落下」は何等實作用にあらざる只の概念である。上述の諸の反作用と一と續である所の、即ち此等反作用によつて自らも作用たるを得た所の「石の落下」が如實の「石の落下」である。換言せば此場合「石の落下」といふ作用は空氣の壓縮、震動、地面の凹むこと、地面の或る反撥力等の反作用によつて成立したのである。後者の反作用を除いて前者の作用だけ獨立にありと言ふは裏の無い表があるといふと同前の無意味である。かく反作用によつて作用其ものが成立するは作用と反作用が統一せられたので、又之を相互作用ともいふ。それで一切作用即相互作用即統一作用である、而して此統一作用は又即ち創造作用そのものである。此等の點を次に尙ほ少し詳にせんとす。

作用に對する反作用といふこと自身が二者の裏面に一箇統一力

が働いてをることを示す。此統一力が働かねば相互作用の成立しやうがない。此統一力は物的には二者に共通の現象として現はれる。石の落下と地面の變化、空氣の震動等は皆機械的勢力の現象である。或は水流に木片の流れる場合水流と木片の流と同性質である。此共通の性質の範圍外では直接に作用と反作用の現象は起らぬ。色が形に、香が音に影響はせぬ。色と色、音と音、香と香の間にのみ相互作用は起る。德と三角形の間には何等の交渉もない。形と形、德と德の間にのみ相互作用が起る。反作用によつて作用が成るのは二者に共通の性質たる統一力の自己發展である。機械的勢力の發展、色の發展、德の發展等である。すべて發展發生は相對する二者の統合として行はれるのである。これ單獨なる作用は有り得ないもので必ず反作用によつて作用其物が成り此相互作用によつて

起る內容が統一力の自ら發展せる新內容である所以である。此意味に於て苟くも作用であるものは皆悉く創造である。作用卽創造である。石の落下で地面の凹むは共通の性質(此場合機械的力)の裡に石と地面と一體となつて地面の凹むといふ一新內容が創造せられたのである。水流に木片が投せられて木片の流れるは共通力の裡に水流と木片が一體となつて木片の流れといふ一新內容を發展したのである。此所には地面の反作用あつて石の落下作用を、木片の反作用あつて水流の木を流す作用を成就せしめてをるのである。物の成るは對立する二者の統合によつて二者の裏面にある統一力が自ら發展する、卽ち自己の裡に自ら對立を設けて此對立の超越によつて新內容を發展することである。而して此所に循環が行はれてをる。凡て循環は三つの點の連絡で充足する、三點以下では足ら

ず三點以上は不用である。上述の發展作用に此三點が必然的に含まれてをる。老子に道一を生じ一二を生じ二三を生じ三萬物を生ずとあるは是れで、三によつてすべて物は成るのである。但し老子の語を三を生ずる以前に先づ二あり二を生ずる以前先づ一ありと解すべきではなからうと思ふ。道が一を生じたとき此一は既に三を藏してをるので、絶對的の一は實在ではない、實在以前である、一ならば在りとしやうがない。於是一があれば必ず二がある。然るに二が二であるのは三があるからである。絶對的の二が如何にして二として相並ぶを得るか、其二たるを得るは二を二として相並べる第三が居るからである。三點の連結で循環が始て行はれて物を成す。作用に對する反作用、其反作用が卽ち作用其物を成す所に生々變化がある。陰陽で萬物の成生を說く場合でも陰陽を合する第三

の力がなければ陰と陽は互に相關せざる別物で卽ち陰でもなく陽でもない。しかも陰陽といひ第三者といひ別物ではない、統一原理そのものである「一」であり道である。

然らば生々變化は一者の自己發展であるなれど自己の裡に對立を起こして此對立の統合といふ形式に由る故、作用ある所に反作用必ずあり、反作用によつて作用が作用となる。此の所に抽象的なる因果思想が生ずる根據がある。卽ち作用と反作用を別ち、且つ作用の持主反作用の持主といふ凝つた實體概念を構へ、ここに因が果を生ずといふ思想を成す。因果思想は實在發展の相をかく一種の型にはめて見たもの、因果律は實在性の一側面、如實の相の影の如きものである。影である故如實の自由を否定する。

偖かくすべての作用は創造である。敎育を一の作用として見れ

ばすべて教育は創造であつて特に創造的教育といふものは無い、只創造の本質を強く現はすと否との相違がある。本來は萬有の現象は悉く皆創造である。教育は其最も狹い意味では意識的に教へんと力むる者と意識的に教へられんと力むる者の間に行はれる作用であるが廣い意味では教育者も被教育者も教育を意識せない裡に教育が行はれるものも含む。すべての作用の如くに教育も或る共通なる活動の範圍内で行はれる、智識的活動、技術的活動、道德的活動はそれ〴〵の範圍で教育作用をなす。只智識によつて術を教へること、智又は術によつて道德を教へることは出來ぬ。智は只智により、術は術により、德は德によつてのみ教へられる。但し此等の間には固より關係があるから其限りに於ては此等の教育は何等かの關係を有つ。又智識にも技術にも種類があるから同種の智術が同種

の智術を教へる。作用と反作用、反作用によつて作用其物が成就する歴程は一息である、其種の作用の自己發展である、其如く教育者の教育作用、被教育者の之に呼應する反作用、此反作用によつて夫の作用が成る歴程は一續きであつて其間髪を容れない。某種の智識又は技術の自己發展であつて、被教育者の所得は卽ち發展せる新内容である。教育者被教育者と別れて前者の作用後者の反作用と對立するは單に其教育内容たる某種の智識技術が自己を分裂して二者の對立として現はれ其の統合として新内容を發展する形式である。個人の有つ智識技術道德なるものは絶對的に其個人の有ではない、すべて此等のものは皆社會的のもの、普遍的のものである、其が普遍的であればあるほど特殊的個性的に發展して個人の心意として起るのである。社會性、普遍性に遠ざかるに從つて其個人のみが有つ

て他人には通じ難い空想迷妄に近づき、眞理に遠ざかる。某種の智識は一箇大なる智識界で、其はそれ〴〵特殊相を帶びた多くの其智識の小體系として游動してをる。卽ち此智識界は有機的體系である。此智識界は自己內の小體系と小體系の對立を自ら起こし此對立の統一によつて新內容を發展する。敎育者被敎育者が個人として有つ其種の智識は卽ち此等小體系である。其背後に此等を統一する原理たる其種の智識界が働いてをる。個人の智識が獨特であればあるほど社會力、普遍力を多く有つてをるから、他の個人の其智識體系に作用して强い反作用を誘起し、かくて兩作用の統合たる新內容はいよ〴〵創造的性質を帶びる。故に敎へる者の智識が深厚であり獨特性を有つほど其敎育力は强い、卽ち被敎育者の所得其物が又被敎育者自身の獨特性を帶びて單なる摸倣でない。

敎育に於て作用、反作用、及其統一は如何樣に現はれるか。敎育者の敎へんとする作用は智識の場合でいへば其智識の內容を被敎育者に向つて開展するにある、被敎育者の反作用は敎育者の右の開展に向つて之を會せんと力むるにある。此際敎へんとの意識、敎へられんとの意識が對立してをる。此對立の意識が狹い意味の敎育の特色である。然るに此對立の極は對立を忘れるのである。敎へんとの意識的努力の極は其敎ゆる內容に純粹に專念となり了はることであり、敎へられんとの意識的努力の極は同じく其敎へらるる內容に一心となつて他念のなきことである。かく其敎育內容そのものに双方が專念となつたとき對立の意識を忘れて同一內容に双方が會する、これ統一である。而して此時被敎育者の會するものは敎育者の述べたる內容そのままではない、敎育者の述べたる內容と自

己が貧弱ながら抱ける其智識の小體系(或は素質)が起こした反作用の統一の成果である、新内容である。是によつて其種の智識界が社會的に豐富になる。機械的記憶、注入的教授といふ如きものには此創造性が比較的に薄弱であるだけのことで全然創造性を缺いではをらぬことは一切の作用が取りも直さず創造である理から明らかである。創造性の薄弱なるは一は教育者の智識等が普遍性に與かることの少ないこと卽其智識等深厚でなく獨特性を有たぬことに由來する。かくて教育の效力は教育者自身の實力に應ずる。但し教育法教授法の巧拙といふことは被教育者の當時の內面的狀態を看取して如何にして之を教育內容の裡に齎らすべきかを知る上にある。是れ教育の方法の重要なる所以である。

かくて教育は教育者被教育者相互の作用として行はれるのであ

るが、絕對的に見れば此等は畢竟それ〴〵の智識界、技術界、道德界等の自己發展の形式に過ぎぬ。教育者個人の心意裡に特殊相を帶びて宿どれる普遍的智識界が被教育者の所得として更に其內容を豐富にして發展する一息の進動、不可分的歷程である。一循環である。而して此不可分的一歷程たるの眞相を最も强く示すものは教育者と被教育者が教ゆること教へらるることを忘れて教育內容の一に會する刹那である。故に又教ふることは實に教へらるることであり、教育者は自己の內容を提げて被教育者に對應折衝するとき其內容が意外なる發展を遂ぐるを覺えることが往々ある。此對應折衝は問答に於て著しく行はれる。ソクラテスが問答法を產婆術と言つたのは尤である、ヘーゲルが萬物發展の形式と見た辨證法のよい實例である。併し他人と問答せずとも自ら思惟することが問答で

あり、作用と反作用の統一である。思惟なるものは客觀的社會的のものである。思惟とは心の內で物語るといふことである、言語を用ゐずして思惟することは出來ぬ。而して言語は社會的のものである、普遍性を有つて特殊を發展せんとする傾向がある。故に思惟すること自身が普遍的思惟の分化發展で、作用と反作用の對立統合を自ら含んでである。若し言語に言ひ表はすときは此歷程が一層判明となる。故に自ら語り或は文章に書き表はすときは思想が一段發展するものである。これ皆其本質に於ては敎育である。故に又何氣なく人が獨語したことが吾には强い敎育となり、無意にして行はるる自然の運行が敎育となる。天言はずして四時行はれ百物生ずるのが眞の敎育である、何となれば敎育の精髓は敎ふる敎へられんの意識を忘れて內容の一に會する所にある。一切の作用は悉く創

造であり、而して敎育は作用の最も切實なるものである。故にオリゲネースは天地の運行を以て神が萬物を敎育するのであると言つた。

最後に智識技術の敎育と道德敎育の間に重要なる相違あることを一言せん。智識技術は某の種の、某の普遍者の內容發展である、從つてすべて分化である。智識技術の進步とは故に益々細密に分れてゆくことである。此分化の裏面に働いて分化を分化たらしめる統一力は某の種、某の普遍者其物であつて、此等の種此等の普遍者間相互に直接の連貫統一はない。たとへば音樂の技術の發達は音樂界の裡に行はれるので其發達が繪畫の技術の發達にはならぬ。音樂界の中にあつてすら尙ほ更らに相通ぜざる限界、方面があらう。數學の智識の進步は數學界の裡に行はれるので、其進步が直接に地

理歴史の智識の進歩とはならぬ。智識技術は其特別の領域に於て益々分化發展してそれぞれ其内容を豐富にするものである。此等の技術智識を幷はせ有つても只其だけならば所謂兼ね有するに過ぎぬ。只抽象的に外面的に統一したまでで、具體的、直接的統一ではない。智識技術の此性質から其敎育は專ら其特殊の内容の作用として行はれるものである。數學を敎ふる者は其數學專門の智識であつて、其敎育が深くなるに從つて益々專門的智識を必要とする。此際歴史の智識は不用である、歴史學の大家は其智識で何等數學の敎育に貢献する所はない。同樣に繪畫を敎ふる者は其繪畫專門の技術であつて、其敎育者が同時に音樂に堪能であつてもなくても繪畫の敎育に直接何等關かる所はないであらう。故に此種の敎育では專門の智識專門の技術が深く且つ個性を帶びてをるほど效果が

ある。

然るに道德は某の種、某の普遍者の發展ではない、從つて其統一力は此等の種、此等の普遍者ではない。此等のもののそれ〴〵の世界を超えて此等のものの共通根源である眞の普遍的立場に於て此等一切を具體的卽ち直接的に統一するものが道德力である。併し固より此眞の普遍的統一原理である道德力は特殊個々のそれ〴〵の智識技術等の生活方面に卽して働いてをるものである。故に道德敎育は特殊内容の上にただよふ普遍的形式によつて行はれる。乃木大將は專門の軍人であつたが其道德的敎化はあらゆる業務の人に及ぶ。商家は之を學んで信用ある商家となり、敎育者は之を學んで忠實なる敎育者となる。乃木大將は其道德的感化に於て獨り軍人のみの敎育者ではない。併し一たび乃木大將が其專門の軍學軍

術を敎へるとならば只軍人のみが其敎を受けるので商家、敎育者は其には何の關係もない。將軍は商業、數學などを敎へ能はぬのである。併し道德敎育に於て將軍も楠公も人類の敎師である。其特殊の內容で敎化を及ぼすならば道德敎育ではない。道德の專門敎師は無い。數學の敎師は其數學的特殊內容によつて數學的智育を施こすのであるが、同時に其智育的仕事の上に表はれる其人格全體の趣きによつて道德的敎育を施こすことが出來る。(修身敎授は特殊の智識技術の敎授と同列のものではない。道德的智識は道德と相表裏すべきもので、ソクラテスが謂へる智、卽ち智卽德の智のことで、哲人の哲學的智である。此智は一切諸種の智識の直接的具體的統一によつて達せらるべきものである。故に嚴密に言へば修身敎授は此智によつてのみ行はるべきものである。)

智識技術の性質上其敎育は特殊の內容の開陳によつて行はれるから被敎育者の之を迎へる心的態度は興味である。興味なるものは或る體系の生長せんとする端緒である。體系の生長は分化によつて行はれ、分化はすべて知るといふ働きに導かれるものである。此點に於ては技術も知るの形をとつて進む。凡て知るは分別するのである、生活の分化發展は知を通して行はれる。故に體系の生長せんとする卽ち其分化せんとする端緒たる興味はすべて知らんとの衝動として現はれる。興味とは知らんとの衝動のことである。是れ智識技術の敎育に於て興味が重要視せらるる所以である。然るに道德は最普遍的統一原理に還へることによりて成る故分化發展とは却て其方向は相反する。分化生長の端緒が興味であると趣を異にして道德的敎化は反省を促がすによつて行はれる。興味が

智識技術の出發點であるが道德の出發點は反省である。道德敎育は被敎育者をして反省せしめる、自己を反省せしめる、其學ぶ所の智識、其修むる所の技術、其錬る所の身體の意義を反省せしめる。何のためにかかることをするのであるかと其根本を自省せしめる。かく反省して知る所あるのが道德の眞根柢であるから此意味に於て道德敎育も一種の智育である、敎訓である。只自余の智識は進步であるが道德的智識は退いて諸の智識の本を尋ね知るのである。其本を知つて始めて其から出づる諸智識が具體的に統一せられる、同時に此等の智識の分化發展に伴つて分化生長せる生活諸方面が統一せられる。

○道德的敎化は特殊的內容によつて行はれずして右內容の普遍的形式によつて行はれることは道德的敎育が眞の自由的創造なることを示す。此點に於て藝術の敎育的效果は道德と同樣である。藝術に於て其技術的方面は其特殊的內容によつて敎へられるのであつて技術的敎育となるが、眞の藝術に於て其內容の上にだゞよふ普遍的形式は吾人の內面に潛む自由界を開放する力を有つ。此自由界はやがて道德的生活の現んずる地である。一切の作用は、從つて物理界に現はれる作用も、皆創造である、意識界に於ては猶更然るのである。而して創造は因果律の必然性を超えてをる。併し此等の創造は其自由性を自覺してをらぬ。智識技術も己以外のものの手段となり、之に支配せられる。從つて又一種の自然界である。故にライプニッツも機械的因果律の自然界の外に意識的生活に於ける目的手段の自然界、卽ち二種の自然界を認めて之に對する道德的自由界と區別した。一切の特殊的內容を全然超越する立場に立つて、

此所からそれ〴〵の特殊的内容を統一するが自由的創造である。其各内容が目的自身である、卽ち具體的全體の肢體である。而して此全體的統一によつて特殊は眞に特殊を呈する。道德的敎育が眞の個性敎育である。又道德の見地から見たとき心界物界悉く自由の現はれである、眞に創造の世界である。

三、道德敎育（其一）

一

敎育は通例天賦の素地を開發することを專らとする。身體あれば身體の發達鍛錬、才あれば才の養成、智あれば智識の開發といふやうに總べて能力の發達を圖る。所謂人材の養成といふ意味が今日敎育の主眼となつてをる。此種の敎育は果樹野菜を十分に作り上げる類である、只天賦の材が人と物によつて相違するまでである。有用の材を養ふは敎育の仕事の重要なる部分に相違ないが材が有用であるといふには何等か目的に關係せしめてのことであつて、たとへば世間で體力才智を公益のために働かすときは之を有用と言

ひ之を私利の爲に働かすときは材却つて有害と言ふが如きである。公益私利の論は別としても兎に角正しい目的に用ゐなければならぬ。其正しい目的を示すには或は國家或は正義或は道德などの言葉を用ひてをる、從つて天賦の諸能力を開發するといふ意味の敎育の外に精神敎育又は道德敎育、人格修養といふ意味の敎育を認めて來ねばならぬ。そこで此意味の敎育は如何樣にして行はれるものであらうか、此も矢張り啓發とか開發とかいふことであつて體力才智の發育と同じ性質のものであらうか。たとへば諸種の科學的智識の學修幷に其を應用する諸種の技術の習得と道德正義の精神の實現とは心的生活として其段階を異にし其等位同じからずといふことであれば其敎育の方法も亦從つて相違せねばならぬ、如何樣に相違すべきであるか。

次に諸能力の開發は元來それ〴〵の能力の素地に據つてそれぞれに行はれてゆくのであるが、或は色欲とか財欲とか或は聞達の欲とかいふものを轉じて技能學問藝術等に向はしめる意味の敎育もあることと思ふ。此場合色欲を轉ずるために青年を身體の鍊磨、技能の習得の方に向はしめ、利欲を忘れさすために智識欲の滿足の方に向はしめるの類と之を敎育、道德、宗敎の如き方向に轉せしめるのとは大に區別すべきものがある。一は謂はゞ一方の流れを防ぐため之を同次位の他の方向に流れしめるので概して有害となり易い方向を概して有用となる方向に轉ずるのであるが、一は謂はゞ一段高い所に勢力を導くのであつて、此一段高い所に上ぼすといふことには如何なる作用を必要とするかを考へねばならぬことと思ふ。此相違は上述諸能力開發の敎育と道德敎育との相違と畢竟同じい。

二

或は人には宗教的本能とも謂ふべきものがあつて自然に宗教に向ふ性質があるとか、或は又道徳的本能があるとか思はれるかも知らぬが之を本能と名づけるときは誤解を來たす。宗教道徳に向ふ傾きは固より人にあるであらうが所謂諸の本能とは心的生活に於て全く其次位を異にするものといふべく、寧ろ反對の方向に進むものともいふべきである。若し宗教道徳の教育に於ても亦啓發開發といふ意味ありとせば感謝の情を喚起するとか、父母長者を敬愛する心を養ふとか、親切心、好意を抱かせるとか、恥を知らしめるとか、辭讓の情、畏敬の情を促がすとかいふ類のことであつて、此等の情或は心を長養するは道徳教育に最も重要であるであらうが、此等の情は

諸種の本能、欲求、要求、衝動と全く其性質方向を異にするもので、後者は悉く生活内容を發展してゆくもの、分化的限定的のものであるに反して、前者は生活内容を增減はせぬので只生活内容の面目を新にする作用をなすものである。如何樣に新にするかといへば今まで本能的であつたものを精神的にするのである、體力は依然體力、智力學識は依然智力學識、勇氣技術は依然勇氣技術たるを失はぬのであるが、其が直ちに皆宗教道徳的のものとなるのである。すべて宗教的生活とか道徳的生活とかいふ特別の生活内容があるのではない。其であるから啓發とか開發とかいふ意味が此所には實は適當しないのである、別に生活内容を發展するわけでないからである。此等の情は形式的又は反省的のものであるから之を喚起長養するとは諸種の能力の長養開發といふことと自ら性質を異にしてをる。感

謝したからとて爲す所は矢張り農工商醫學問技藝である、敬愛しても恥を知つても好意を抱いても生活內容は本の通りである、只之を爲す意味が違つて來るまでである。智能を啓發する場合の如くにそれだけ生活內容が增したのではない。故に此等宗敎道德的感情を養ふのは開發敎育と名づけた所で意味が違ふ、從つて開發の仕方が違はねばならぬ、智識技能の養成とは別段でなければならぬ。つまり智識技能其外一切の生活內容の上に就いて之を養ふ外はない、學校敎育で言へば諸學科幷に其外學校生活全體の上に洩れなく此感情が働くやうにする外はない、別に道德的生活といふ特殊の內容がないからである。若し此等一切の生活內容を離れて道德敎育を施さうとすれば只形式的抽象的となつて仕舞ふ。

三

道德敎育又は廣く宗敎道德的敎育の此特色は宗敎道德的感情の養成といふ如き一見積極的或者と見えるものを開發するといふのでなく全く消極的方法に由つてゆく所に却てよく看られるかと思ふ。卽ち此方法は諸能力の開發助成とは反對の道を取るので、心に起り來る欲求要求を手も無く斥けるのである。戀愛なら戀愛を他に轉ずる、卽ち其內に積りてしかも思ふ通りにならぬ所から學術とか功名とかいふ方に心を轉じて其欝勃たる心を遣るといふ方法ではなく、只無二無三にこらへるのである。是れはあきらめるといふのとも違ふやうである、自分でいろ〳〵慰めるやうに事を構へるのではない。さういふ望を起すはわるいとか、それより高尙なものが

あるとかさま〳〵自分ながら言ひ譯をこしらへて自分に納得さすやうにするのではない。いかにも赤裸々に其執着愛着に對面して然かも何等の理由も設けずに之を振り棄てるのである。元來かかる愛着の起るは本がなければならぬ、自然に生ずるもので決して無理なものではない、しかし其であるから之を遂げるのが當然であるとは言へぬのである。如何に無理からぬ要求でも世間で通らぬ時は通らぬのである、出來ぬことは出來ぬのであるからこらへるより外に道はない、さなくは徒らに悶亂し苦惱して實に見苦しいことである、是非とも通さうとして常軌を逸し狂態を演じ衆人に迷惑を及ぼすやうになる。無理からぬ願ではあるが通らぬことであるから之を斷つのである、殺すのである。しかし本があつて生起した念は斷ち了うせることが出來るか、果して殺すことが出來るか、そ

れは心そのものを殺すといふ不可能事ではないか。固より斷つといひ殺すといふは一面からの言い方である、其實は之を斷ち之を殺す、無二無三にこらへるといふ働きそのものが大なる積極的作用である、裏面に積極的の力なくては表面に否定作用は起らぬ、此否定作用を振ひ起こすことによつて油然として未だ曾て覺えたことのないものが、或る積極的のものが起つて來ることと思ふ。此積極的なるものは如何なるものであらうか。戀愛とか功名心とか富の欲とか卽ち色と名と利は强烈なる念力である、其を何等の媒介にも由らず何等の代償も受取らずにひたおしに押し除けることの出來る力は智術でもなく策略でもなく慰籍でもなく激越でもなく、赤手天下の戰塵を掃蕩するにも勝れる超絶的の力でなければならぬ。此力が元來あつて其を用ゐて欲求に克つたといふのではない、克つこと

によつて此力が實現せられたのである。此力は食色乃至名利の念力と畢竟別のものでないかも知れぬ、しかし一段高い所に現はれて來たのであるから夫の食色名利其他一切欲求、一切能力之を取りもすれば又之を捨てもする、自ら此等の何づれかの一と一體ともなれば又此等の何づれとも離れることもするものでなければならぬ。此等の何づれかに乘つてでなければ一歩も現實界に履み出すことは出來ぬかも知れぬが決して乘せられはせぬ、常に自ら主となつて手綱を握つてをるものでなければならぬ。

かかる力を得てこそ夫の開發せられた一切の智術技能が眞に有用の材たることを得るわけである、其道を誤らずに正しい目的に之を使つてゆくことの出來る自由力を得るからである。而して此力を得るには無理からぬ願望要求も無手にこらへねばならぬ。

四

熊掌の珍味は人の欲する所である。好色は人の欲する所である。立派な地位は人情之を欲するに何の無理はない、巨萬の富を擁して親族知人に恩を施したいは人情である、公共の事業のために寄附したいのも只ありふれた人情である、權勢を取つて天晴れ美事な政治がして見たい、蠻地を踏破して富源の開拓が試みたい、濤を凌ぎ險を攀ぢて地理を研究したい、完全なる設備で理化學の考究をしたいも人の自然の要求である。食色の欲より究理心に至るまで其品質大に相違し其生活發現の階段は異なるのであらうが、しかし何づれも生の要求たるに於て、生活內容の分化發展たるに於ては畢竟同じいと謂はねばならぬ、場合によつてはこらへねばならぬ斷念せねばな

らぬことがあるものたるに至ては畢竟一である。科學の研究がして見たいといふは殊勝な望である、左樣な願望を抱く人の多からんことは好ましい、固より美味を欲するなどとは同日の談ではない。しかし事情が許さぬ時はこらへる外はない、或は到底斷念する外ないこともあるであらう。若し强いて之を遂げんとせば自他の生活を破壞する方向に一歩進んだものとせねばならぬ。しかし感謝の心、敬愛の念を斷たねばならぬ、忠孝とか正義とかいふものをこらへて仕舞はねばならぬといふことはあり得べきことではない。これで智識技能の要求と雖も之を道德に比べるときは食色利達の欲求と共に夫のこらへて仕舞はねばならぬ、之に克ち之を斷たねばならぬことのある生活部類に屬するを知るべきである。我生命と一族故舊に恩惠を施こし或は多大の寄附でもしたいといふ願望とを比

すれば固より前者が重い、其大切な生命の欲もこらへねばならぬことがあるかも知れぬが道德を捨てねばならぬといふことはあり得べきことでない。而して欲しいことをこらへる働きは其欲しいことの何たるに拘はらず同じ働きである。小兒が甘菓の欲しいのをこらへるのはやがて青年になつて女子の誘惑に堪へる力の修養である。同じ理で戀愛に堪へる力は名利の欲求に堪へる力でなければならぬ、只其難易が人の氣質によつて違ふ。求知心、好學心といふも一種の欲求ではなからうか、言葉の用ゐ方にもよらうが是は眞理道德に向ふ心とは必ずしも同一ではない、寧ろ一種の征服欲である。學術に向ふ態度について注意して區別すべきものがある。固より眞理道德の立場からの求知好學は純粹なるものである、しかし他の諸の欲求も同樣に純化せられ得ることと思ふ。カントがすべての

感情、愛好を斥けた所から、シルレルは予は友人のために盡さんと思ふが其には先づ予が友人を愛好する心を抑へてかからねばならぬ、さなくば夫のいかめしき義務の念に背くから云々と諷刺したといふことであるが、果して然らば是れ寧ろカントの眞意に達せなかつたと言はねばならぬ。實に道德教育は畢竟すべての自然的愛好をこらへる斷念する所に其深い基礎をかねばならぬことと思ふ。

五

財産、戰爭、國家を求めるものは獲得本能である、婚姻、教育、學藝を求めるものは創造本能である、今日社會經綸のやり方を改める第一の道は獲得本能を轉じて創造本能となすにあると說くものがあるが、是れはつまり現代の歐米文明の弊に鑑みて立言したのであつて、若し本能に右の如き差別を認めるならば何れの時世に於ても右の轉化が必要であり又眞正の爲政者は實際そうしたのである。しかしかゝる本能の差別は唯一應のことである、根本的にあるのではない、それ故互に轉ずることが出來るのである。財を求むる心がなければ天下を富ますことは出來ぬ、權勢を求むる心がなければ社會的統一の動力を缺くのである、戰ふの心がなければ社會を擁護し惡逆を退治することは出來ぬではなからうか。一を轉じて他となすといふは以前に述べたやうに遣る方なき戀愛の欝積を博識廣才の追求に洩らすといふ類の仕方である。是は有害となり易い欲求を有益となり易い欲求に轉ずるの道であつて固より人心を善導し社會を統一するには古來用ゐられたことであるが、又上にも說明した通、どちらも本能的希求としては同じいものである。戀愛必ずしも惡

いことはない、これ人倫の本となる。反之博識廣才を以て武人を援けて朝權を奪ふことも出來たのである。本能は悉く本來創造的のものと思はれる、悉く生活內容を發展分化してゆく發端である、悉く限定的のものである。宗教道德的教育は其一を轉じて他に向けるにあるのではない、一切の本能をこらへる、否定する、殺ろすことによつて新生せしむる所に宗教道德的教育の本旨がなければならぬ。創造的教育とか開發的教育とか言ふものはすべて只人材養成といふに過ぎぬので、若しそれだけならば果樹蔬菜の培養と同性質のものである。道德教育を豫想して始めて人材開發の教育が人間らしい教育となれるのである。眞の個性の發現するまでには何處かで道德教育、夫の否定的教育の關門を通過せねばならぬ。如何なる希求願望も之をこらへる力を實現して來ねば眞の個性は其面目を發

揮して來ぬわけである。

六

然るに人類には生活內容限定的、分化發展的である諸の本能衝動欲求願望が具はつてをり又之を喚起誘發することが出來ると同時に、幸に反省的反始的の情とも謂ふべき、理性的感情とも謂ふべきものが出現して來る所から、先哲先覺は此種の情を長養して其の力によつて彼の諸本能に克ち且つ之を採るの道を講じた、克つと採るとを別にせずして化するの一作用の裡に兩者を統一せしめたのである。甲種の情を以て乙種の情を化するのである。感謝の情に本づいて宗教報德の道を立て、敬愛の情に本づいて忠孝を敎へ、羞惡の心に本づいて節義の道德を興こし、忠恕惻隱の心に本づいて人道正義

を實現せんとしてをる。此等の感情を長養する所から之を開發教育と言はれぬことはないが、生活內容を創造する本能的原力の開發とは大に其性質を異にし、其裏には一切の創造的衝動を否定する作用が籠つてをるのであるから、些の混同なきやうにするは教育上最も重要なることである。此意味に於ける宗教道德教育を土臺として夫の創造的開發的教育が教育といふ名に値いするやうになれる。若し之を怠つて只管體育とか科學的智識の普及とか工藝技術の學習とかいふことばかりを教育と思つて居れば獨逸が陷いつたやうな運命に遭はぬとも限らぬ。彼は有力なる道具としての人間を養ふことに全力を注いで社會生活の根本たるべき精神の扶植に相當の力を用ゐなかつたことゝ思ふ。才力智力技術の速成、能率を高くする手段のみを考へる所から教育上の便法のみを案じて、或はロー

マ字が力の浪費を省くとか言語交通を簡易にすべしとか主張して、只歷史に於てのみ宿どる精神道德のことに考へ及ばざるのではないかと思ふ。材を養ふのみを考へて材を使ふ主人公を忘れるは危いことである。功利の學は到底獨り立ちは出來ぬ、若し强いてそうしてゆけば自滅に赴く時が來る、功利の學は道德の學の上に於て始て立つことが出來る。衣食足つて禮節を知るとは矢張り禮節の俗を豫想してをるから幾分の眞理があるのである、衣食さへ足れば其所から自然に禮節が生れると思へば大に誤りである。孔子も兵を足し食を足し信を立てることを政治の要領とせられたが、三者中止むを得ざれば先づ兵を缺き次に已むを得ざれば食を缺くとも民に信なければ社會は顚覆するものと說かれた。經濟の基礎の上に道德が立つのではない、道德的基礎の上に經濟も立つのである。一切

教育は道德教育の基礎の上に立つので、それで始めて教育といふ名に背かぬ。

七

しかし道德教育は感謝、敬愛、忠恕等の理性的情の涵養によるばかりではない、上に述べた夫の無二無三に欲求愛好をこらへさすことも力めねばならぬと思ふ。戀愛をこらへる、立派な地位に上りたいのをこらへることによつて内に自ら一種人間的價値らしい或者の起ることを覺えて來ねばならぬ。無條件的にこらへるとはいふものの、此際、或は、我も一箇の男子である、こらへではおくべきかといふ如き一種の情が働いて、其情の力で抑へるのかも知れぬが、とにかくに是は純然たる否定作用であつて、感謝、畏敬、仁恕等の働きによるの

ではない、赤手もて跳り出づる意志力である。此所に人間が自信力を得て自己超脱の境にも達し得べきである。苦しいつらい所から楽を現はして來る樂地であるべきである。ネリグマを嘗めて後に水が甘いやうな心地であるといふ形容もあるが、欲求願望をこらへる苦がい經驗そのものゝ裡早くも日常平凡の生活にもこれまで覺えなかつた甘味があることが分かるといふのであらう。健康の利を說いて體育を勵まし、小兒には其好む所を與ふるを約して勉强せしめ、青年には立身出世を目的として勉强せしめるなど好餌を投じ興味を刺戟して生活内容の發展をのみ計るは皆或は經濟本位的或は自然主義的或は似而非自由主義的或は似而非なる宗教的藝術的或は非歷史的等の現代文明の弊に陷れるものであらうかと思ふ。上にも述べた通り七歳の小兒が食べたい甘菓をこらへるは三十歳

の壯年が女子に對する其愛着を斷つの修業である。然るに甘旨を欲するは小兒の自然であるからと言つて只管其自然の要求を通ほすことに汲々とし、或は手を換へ品を換へて種々面白い話を聞かしめ、其が兒童の能力の啓發であると考へるは只盾の半面だけ見た敎育ではなからうか。人は如何なる無理からぬ欲求も斷念し得るの修業をしてこそ眞の敎育といふことを得る、かくて一切の能力開發は皆眞に有價値となる。面白くない話でも努力して聞くやうにするは最も大切な敎育であるに、只管面白く聞かすやうにするのが敎育の上手とのみ思つてはならぬ。固より斷念するによつて實現せられる高尙なる力は斷念した欲求の力と根本に於て別ではあるまいから、妄りに兒童青年の欲求要望を抑へるべきではない。所謂牛を殺して仕舞つてはならぬ。又こらへねばならぬことある本能衝

動であるからとて此等が弱いのが或は缺けてをるのがよいと言ふのではない、欲求が起らねば之をこらへることによつて現はるべき高尙なる力も起らぬ。欲求が強ければ之をこらへるにも強い力が必要であるから、欲求の薄弱なるものが夢にも知らぬ境涯を欲求の強いものは之をこらへるによつて味へることが出來べきである。ミルの所謂強い欲情を強い理性で制する所に立派なる人格が起るべきである。ミルの意は固より理性が本から居つて欲情を制するといふのではない、制すること、こらへることによつて理性が實現せられると言ふのでなければならぬ。かく何んでもこらへさして理性を實現せしむるやうにする敎育が今日は大に缺けてをりはせぬかと思ふ。却て興味を煽り刺戟を加へて出來るだけ諸能力を開發することのみに偏してをりはせぬか。能力の開發は固より必要で

あるが、能力は理性の統一の下に於て始めて人間的卽ち社會的である、始めて人生を存續するに足るものとなる。理性的統一を脫したならば諸能力は生存競爭的の自然生活に過ぎぬ。而してこらへることを學ばぬものは理性と意志を發達することが出來ぬ。

四、道德教育（其二）

教育のことは種々の方面にわたつて細かな考慮研究を必要とし又時勢に應じて適當なことを考へねばならぬが、併し又最も廣い高い所から眺めて古今東西に通じて動かざる教育根本に就ては確乎として豫ねて信ずる所あるべきは勿論のことである。道德教育といふ特別の名のあることが既に誤想を起させる虞があるかと思ふ。すべて教育は皆道德教育でなければならぬので特別に道德教育といふものが他の種類の教育と並立するわけではない筈である。吾人のあらゆる智識技能の外に道德力といふ特別のものがあるならば勿論道德教育といふ特別の教育がある筈であるなれど、決して左

様なものがないのであるから諸の智能の養成開發と別に道德力を養ふことは出來ぬのである。道德といふ特別の生活內容がない以上道德敎育を特種敎育と考へることは出來ぬのである。道德とは一切生活內容の統一のことであるから道德敎育とは一切諸智能の敎育を貫通する敎育的態度に外ならぬ。此一貫的敎育態度を缺いては恰かも生活內容が支離滅裂となると同樣に諸種の敎育も敎育の本意を失ふわけである。故に敎育に臨むでは人心について根本的に見る所がなくては折角の精細なる諸種の敎育的思想も全豹を知らずして其一斑を細かに詮議してをる誹を免れず、且つ其よりも重大なことは、實際の敎育が其本意を失つて人の子を傷ける如き結果を齎らすのである。道德敎育とは諸種の敎育がよく統一せられて常に其歸一すべき結局點を見失はず之に連貫して行はれること

に外ならぬ。只そうするには或は特別の敎訓を施すことも必要であることがあるに過ぎない。道德敎育を缺いてはすべての敎育は只役に立つ道具としての人間を養成するまでであつて、其役に立つ道具は人生を建設する方にも之を破壞する方にも役に立つのである。藥にもなれば毒にもなるのが人間一切の智能の本質である。道德とは何ぞやと一言にして之を如何に表はすかといへば道德とは生きる道であると言ふことが出來ると思ふ。道德とは一切生活內容の最も深い統一のことに外ならぬから道德によつて始て生を全ふすることが出來るので、道德が薄弱であるといふのは生活の統一を缺くといふことである、卽ち眞に生を全ふすることが出來ず結局は生活の支離滅裂となるを免れないことと思ふ。故に修身敎育といふ特別の科目は設けてあるが其はすべての敎科を敎育的に有

意義ならしめるための設置に外ならぬのである。試に思ふべし世の中の道德を離れては算術に精通するといふことに如何なる人間的意義があらうか。法律に精通する、土木の技術醫療の術に堪能であるといふことに道義を離れて如何の人間的價値があるであらうか。道德は生活の最深統一であることから嚴密に考へてゆけば道德に外づれて眞に大なる法律家數學家技師醫師が出來る筈でない。教育の學は言ふまでもなく人を教育する術を講究する學であるから人間そのものを最も深い所から其最も淺い所にまで及むで洩らす所なく承知せねばならぬ。天地人生に關する一切の學問を豫想してでなければ教育を論ずることは嚴密に言へば出來ぬのである。實地教育に從事するに就いては戒愼恐懼人の子を賊することなきやと思ふのである。病を窮めずして濫に藥を投ずるものはあつて

ならぬ筈である。人間といふ如き萬物の靈について吾人の知る所は定めて淺薄たるを免れないから最も謙虛なる態度を以て賢哲先覺の言に省みねばならぬことと思ふ。道德教育が一切教育をして教育たらしめるもの、人間の教育とは取りも直さず道德教育に外ならぬといふ主意は蓋し東西古今動かざる教育的態度であると思ふ。一二の例を擧げて全般を推さむ。

人間的生活とは文化的生活、換言せば精神的生活のことである。文化には必ず歷史がある、歷史なきもの卽ち一貫なきものは自然的のものであつて文化的卽ち精神的のものでない。西洋文化の歷史的淵源はギリシャ文化とキリスト教である。於是宗教と古典は西洋に於ける一切教育の根本となつてをることと思ふ。英國に於て宗教と教育は年來合一して、夫のオクスフォルド、ケンブリッヂの二

大學の如きは教育と宗教の合一體なりと稱せられてをる。又其初等教育も一八七〇年までは實に全然英國々教々會の手にあつた。故に諸種の教育は宗教的精神を以て一貫せられ上帝の道を信ずることが百般の行爲の中心となつてをる。大學教育は諸般の學科に分れてをつても其すべてに通じて宗教が統一的中心となつてをるので決して單に專門的學科の教授のみを大學教育としてはをらぬのである。又宗教と相並んで古典を尊重することも英國に於ては昨今のことではない。マコーレーは印度商社の役員採用試驗には古典と數學に重きをおくことを定め、又セシルローズはオクスフォルド大學奬學資金制を建てたといふことであるが、これ皆道德的人格の養成は古典及數學の如き非功利的の學問に依らざるべからざるを見、而して道德教育が英國の繁榮、海外發展の根本力の養成なる

ことを見たのであると思はれる。傳聞する所によれば英國にては戰後教育の大方針として古典の普及を計り其手段として古典飜譯所を設立せんとしてをるとかいふことであるが、英國の此教育方針は今日に初まつたことではないが、しかし戰爭に鑑みて益々此道德教育を盛むにせんとしてをるのである。是れ他種の教育の外に古典の教育を施こすといふ意味ではなく諸種一切の教育、特に功利的實業的教育を眞に有效にする卽ち人間的價値あらしむるものは道德教育なるの意味である。古典は道德教育の手段に用ゐるのである、是れすべて文化は必然的に道德的精神の實現であるからである。かく英國の教育が教育の眞意義を得て居り其國の隆昌なる偶然にあらざるを思はしめることは又かの有名なるヅモランの著書に英國の或る學校のことを記してをる一節がある。曰く、其學校の教育

綱領の中に言へるあり「宗教は吾人の終生を一貫す、人生は實に之を以て隙間なく充されざるべからず。本校は日常生活の一部分として兒童に宗教を勸めず云々。其一擧一動は悉く宗教に之を攝取して人生を圓滿ならしめんとす。されば本校にては朝夕一同十五分時間神を禮拜して信仰と希望を告白す」と。ここに十五分時間は間斷なき宗教的生活の象徴に過ぎぬので、其宗教的生活とは別種の生活ではない眞正の人間生活のことである。學校に於ける諸種の學問技術一切の起居動作は道德的精神を以て一貫せらるべく、其等生活内容の外に宗教道德があるのではない。修身の學は諸學科の中の一でなく初等教育から大學教育に至るまで道德教育が一貫せねばならぬといふ主意である。しかも此道德教育は一切の智識技能が働くべき精神的態度の修養のことである。

先年陸軍教育令の改正せらるるや當時其局にある某將官之に就いて曰く、教練武技は末である、軍紀、軍人精神が眼目である、これ戰に役に立つ人間の本である。其軍紀、軍人精神を如何にして養ふかといへば教練武技の實習の間に於てする外はない。一擧一動皆この精神を宿どし此精神の現はれであるやうにするのである云々と。是れ固より當然のことであつて學校教育に於ける一切の教科も末であつて國民道德の精神が眼目である。此精神によつて一切の教科が教育的價値を得て來る。しかし此精神を如何にして養ふかといへば一切諸教科の學習上に於て其外學校内外の生活方面の上に於て之を養ふのである。諸種の學識智術の學習は道德教育を豫想して國家にも人道にも有意義となるのである。これ上述英國教育の本旨であるが、我が維新前に越前福井藩に於て舊來の明道館に西

洋諸技術の講習所を併置した際明道館の總裁ともいふべき地位にあげられた橋本左内氏が右講習所設置の主旨につき度々藩主に建言してをるが全く同じ主意である。曰く此度御端立の御趣意は兵法、器械術、物産、水利、耕織等の諸術を彼の長に就て學び取り我が義理純明の學を補助被遊候思召にて決して明道館の學の外に洋學と申す一派御營建有之趣意に候はず行々は己上の科を學び候者迄も學一經に通じ候者御選み其方の長所に從ひ夫々可被仰付筈に候間全く今日銃術馬術等御引立被成候と同樣の事に候云々。卽ち道德が諸種の學術技能を一貫すべきを言へるにて、今日では農工醫商等すべての大學敎育に於てもそれ〴〵の專門的修業の外に所謂學一經に通ずるやうにせねばならぬ、宗敎道德的敎育を施さねば只技術家の養成、道具としての人間の養成であつて、主人となるものを閑却することになる。橋本左内は尙左の如く言つてをらるる、曰く、學問は道の修行にて藝術而已修行にて無之義勿論に候處兎角藝能而已と心得候者有之自ら儒官に成る身分には無之候間深く學問致候には不及抔と常によく申す人有之候畢竟學問を技藝と心得候よりの間違に候云々。當時は政敎一致文武不岐と言つて之を敎育制度の上に實にせんとしたのである。又曰く、學問は衆藝の本文武一致の敎に候間禮儀筆算兵學所弓馬刀槍諸武藝之場所までも不殘明道館に附屬致し云々。之を今日に適用して言へば高等專門の諸學校及大學各學部に通じて道德的精神の敎養に備ふべき制度として全體の統一を計らねばならぬ。英國の大學が敎育宗敎の合一體たる主意、古典の敎育を一般に普及せんとする主意も全く是に外ならぬのである。

以上多言を費したれど事は殆ど自明的であつて道德實行の專門家があるのではなく農も商も工も醫も總べての人が實行すべき道德であり、而して何人も道德の卒業はせないのであるから、特に他日社會の上流に居るべき專門的學術技藝の大學卒業者のために大學に居る間に道德的修養をなすべき施設があるべきことと思ふ。而して其外小學校を初め何れの學校のいづれの敎科も獨立に價値あるものは一もないので、道德に統一せられて人間的となるわけである。是れ一切の敎育は道德敎育の上に立つといふわけである。

五、訓育に就いて

訓育の本旨は理を事に寓して之を心身一致の具體境となすを力むるにあるのであらうと思ふ。故に只敎訓によつて思想を傳へ、談義によつて感情を喚發するのみでは訓育とならぬ。又只身體を鍛錬し、勞苦に遭はしめ、作法を習得せしむるのみでも訓育とは謂い難い。思想感情を身體の動作と結びつけて、身體の動作は思想感情の實現となり、思想感情は身體の動作の主人となるやうに馴致するのを訓育と云ふのであらう。たとへば兒童に只孝行の話しを聞かせたばかりでは、如何に理義明白であつて兒童の心に合點がゆき、如何に懇切熱心に話して兒童の情を動かしても、之を事に宿どす仕組み

が缺けて居ては折角誘發せられた思想感情も半ば抽象的となつて仕舞つて、其時かぎりとなり勝ちである。又只履物をぬぎそろへて置かすとか、出入に親に挨拶をさすとか、角力をとらして勇と力を養ふとかでは器械的となつて仕舞ふかも知れぬ。此等の動作作法を孝なら孝の思想感情と結びつける仕組みが訓育といふのであらうかと思ふ。身的と合した心的は抽象的から轉じて具體的となる、卽ち實に活きて來る、人々獨特固有のものとなる。心的と一致した身的は器械的非道德的(只の勇力は善をなすにも惡をなすにも用ゐられる)を去つて象徵的となる。蓋し眞理とは心身一致の現實の境涯のことであつて、心身離れては双方共抽象となつて未だ眞理にあらずと謂ふのである。從つて實に有力なるもの、活きたものではない。眞に活きた精神は必ず何等か具體的の仕事として現はれるもので

ある。さて心的を宿どすべき動作作法といふは讀書、算術、習字其他すべて學校の課業をも指すべきである。此等の課業は只其自身だけでは兒童が將來之を利己的目的にも利用し得る力を養ふに過ぎぬ。此等の課業一切に道德的精神が、すき間なく働いて實に始めて眞理となる。して見れば學校の課業全體に一箇道德的精神が貫通するのが則ち學校の訓育といふべきである。但し右は理想であつて、實際にかく致すのは至難のことである。よつて何にか若干の動作作法を取つて特に敎訓と結びつけて、敎訓を事實に現はし、日常反覆せしむる方法を案出するのが訓育といふものならむと思ふ。其實際は兒童の年齡に應じて、簡繁其度あるべきは勿論ならんが、大體簡明なるのが有效であるかも知れぬ。此等具體的詳細のことは實地の經驗に俟つべきかと思ふ。卽ち訓育が眞の德育のことであつ

て、德とは只の理ではない、努力によつて此肉體的生活と理を融合合體せしめたものであらうと思ふ。訓育とは正さに努力を助けることである。

六、人道的教育

力に據つて立つは自他相對抗するものであり、德に據つて立つは自他相全ふするものである。自他相全ふする道に由つて行けば他を全ふすることによつて自を全ふするのであるから長久の道である。自他相抗する道に由つて進めば己れに勝りて力あるものは常に一つも無いやうにせねば倒れる期が必ず到來するのであるから是れ滅亡の道である。一身一家の消長も邦國の隆替も此理に外づれぬ筈である。ウイリヤム、スミスの「支那人の特質」と題する著書の中に、「古來文明國として四千年の長きに亘つて今尙ほ存續してをるものは獨り支那のみであるが、是れは他の文明國は物力に據つて立

つたが支那國民は道德力に據つて立つてをるからである」といふやうな意味のことを言つてをる。此論斷に十分なる歷史的根據があるか否かは予には未明であるが、しかし物の道理は如何にも然るべきものと思はれ、且つ又十分ならずとも多少の事實的根據が此論斷にあるやうに思はれる。

覇者と雖も仁義を假るといふは表面を飾るためではない、實際仁義に合ふたことを爲さなければ國土民人を統一して之を治めることが出來ぬからであらうと思ふ。向ふの利益を計ることは少しも爲さずして一向自分の利益ばかりを計るは永續きの出來ぬことたるは勿論のこと、實は一時たりとも六ヶ敷ことであるやうに思はれる。只覇者は中心から之を行ふのでないから何時しか之を忘れて其地金を現はすから遂に倒れるのである。支那の代々の帝王は覇

道を雜じへて力を以て天下を取つたから王家は興亡して永續してをらぬ。然るに支那國民としては之に拘はらず國民としての文化的統一を存續維持して來た。アッシリヤ、エジプトの往昔は暫く措き、ギリシヤ、ローマの優れたる文化を載せた原語は死語となつてをるが、漢民族の經典の言語は爾後幾變遷はあつたにせよ兎に角現在の支那人に活きて續いてをる。斯かる文化的統一の國民的繼續の長年月に亘るものは世界に稀有の例である。是は支那人が他民族に勝りて道德力に據つて立つてをる故であるなどと論明することは六ヶ敷い。何となれば古今東西の文明的國民はいづれ劣らぬ道德的思想道德的實行を現はしてをるとも見られるからである。然れども此裡又注意すべき次のやうな相違がある。卽ち獨立自尊といふ如きは恐らくアメリカ邊から傳つた意であらうが、恭儉己を持

すといふ如きは寧ろ孔孟の流儀と一致してをる。又は生存競爭・權利競爭といふ類は歐洲人の言葉であつて、讓といふは支那にあつては古來社會道德の骨髓とも謂ふべきである。進化とか發展とかいふ言葉を取り去れば歐米人の思想は骨拔き同前となるとでも謂ふべき程であるが、之に反して報本反始などといふのは支那の哲學思想には缺くことの出來ぬ言語であるやうに思ふ。米人は兒子の擁護敎育には餘程骨を折り、又すべて新を好む風であるといふことであるが、支那は又之と反對に祖を崇敬し、喪祭の禮は鄭重に過ぎ、又すべて古を尙ぶ風が見える。西洋人は自由を主張し自由といふものを至つてよいものとしてをるが支那では孝順とか順良とか其外すべて從といふことがよいこととしてある。西洋では夫婦の間には類りに愛といふことを八釜敷言い、從つて又兩人自身の幸福は婚姻

の大なる目的としてをるやうであるが、支那は古來夫婦別有りと敎訓し且つ婚姻は全然家の存續のため、祖先の祀を絕たぬためのものとしてをる。兩者の敎訓風尙の上に見はれてをる此類の反對相違は、此等幷に其外幾多の類例より思索的に究め入つて其差異の由つて生ずる根本を捉へることも出來るであらうが、又此等國民の裡に實地多年生活して見たならば各々の生活の肺腑を穿つて其性情の根本的に相違ふ所を會得することが出來るであらう。

固より道德的敎訓としては東西古今自から一致する所があつて、ギリシヤではすべて其過ぎることを戒飾して節制を敎へ、ローマ人は法を重んじ特にキリスト敎は人類同胞の愛を說き柔和の道を敎へたのであるが、西洋人種の今日の實際の活動を見るときは餘程其爲我的侵略的特色を現はしてをる。彼等は方今世界の强國である。

世界の強國とは如何なる事實を指すか。人の國を取つて廣大なる領土を占め或は諸の利權を世界到る所に擴げつつあるといふことが其特に著しい點である。しかし其國が富强であるといふ事と、道德的であるといふ事とは必ずしも一致しない。一個人として其富めるが故に又は其權勢を有つが故に敬愛すべきでないとすれば、一國としても單に世界の强國であるといふことは人間生活の眞價の標準とはならぬ。英米は勿論のこと、戰前までは獨露の如きも皆所謂列强であつた。彼等は東洋諸國、アフリカ、南米南洋等の諸民族の國土に或は武力を以て或は財力を以て侵入した。歐米人間の相互の爭も多くは此侵入の競爭から起つてをるやうである。而して此侵略の結果被侵略者たる諸民族は或は漸次其人口を減殺し、或は其慣れ來り樂しみ來つた固有の風習を攪亂せられ、其厭ふ所の仕事勞

働を强ゐられ、或は其祖先以來の信仰の代りに西洋宗教の信仰を押し賣せられ、結局今まで各自の固有の國土に安んじて有形無形自ら主人であつたものが異人の奴隷となり了つた。而して是れ固より彼等被侵略的民族が西洋人に對して少しでも惡事を仕掛けたからといふのではない、全く罪はないのである。又所謂富源の開拓と稱して人類に文明的惠澤を加へるかのやうにいふ事も多くは世界各地の天然を科學力で破壞して、而して其獲る所の利益は徒らに侵略者の侵略的武器たる財力を益すに過ぎぬ。其種族を異にし其習俗文物を異にし而して結局其智と力とに於て劣つてをる他民族を斯樣に壓倒して世界に覇を振ふものを世界の强大國などと稱して美望し尊敬すべきであらうか。一國內に於て弱者劣者を壓倒して自己の富强をのみ事とするものを擯斥すべきならば、國際間に於ても

斯かる富强者は卑しむべきである。優勝劣敗は生物界の法則卽ち禽獸の道である。人間の法則卽ち人道正義は强は弱を扶けて强弱優劣各其所を得るにある。固より大小强弱の別は個人としても國民としても廢することの出來ぬもの、又此別のあるは當然のことで、反道德的のことではない。卽ち大國の大國たるはよく小國を保全し、其住民をして其俗に安んじ其生を樂ましめるやうに世話をする所にある。かくてこそ世界の大國として敬すべきである。正義人道とはこのことである。此意味に於て今日最も正義人道に背いてをる國民は支那人でもなく印度人でもなく其他アフリカ人南洋人等でもなくして、正義人道を人に向つて頻りに唱ふる歐米の强國である。

漢民族は古來侵略的ではなかつた。其極めて獨創的なる文化、卽

ち其異彩ある道德宗教學問藝術は歐洲の文化とは自ら別趣ある天地を開いて居るが、其力を侵略に用ゐることは餘り爲さなかつた、漢の武帝唐の太宗などは隨分兵を用ゐたが是れは一つは四夷の侵入を防ぐためであつたと思はれる。而して其れすら彼等の賢臣は之を諫止せんとしてをる。彼等自身又多少悔いた樣子も見える。蒙古人は一時大に侵略を逞くしたが今日は却て大に衰へてをる。之に反して漢人は寧ろ常に受身の地位に立ち、政權は一時之を失ふことがあつたが、其固有の優秀なる文化は之を失墜せず、却つて侵略者が其文化に化せられた趣がある。彼等の歷史家は成敗によつて史的事實を評價せずして、道德的標準に據つて褒貶を加へてをる。戰國に於ては秦が一番强かつたが一番尊ばれはしなかつた。三國に於ては魏が一番强かつたがこれ又一番尊ばれたわけではなかつた。

支那人は國内の統一には甚だしく威力を用ゐ、國内政權の爭奪は大に行つたが、其國民は侵略遠征を好む民ではない。是れ今日其國力が衰へてをるからといふのではない、古來そうである。此點に於て歐洲民族と其氣質が大に違つてをる。予は此點が大に注意すべき所と思ふ。漢人は其文化は優れてをりながら古來北方の剽悍なる民族に困められ、支那の歴史を通じて殆ど弱を以て終始してをると謂つてもよい。然るに拘らず漢人の文化的生活は最も永續して來てをる。何が故に然るのであらうか。

周公孔子の道は支那の政敎的組織卽ち其國家的組織を模範的に示したものと思はれるが、是は生活の積極的方面と消極的方面、支那哲學の言葉で所謂陰陽兩面を圓滿に調和的に組織したもので、其所謂禮とは此組織のことである。しかも此禮は讓といふことを根本

とせねば實行が難いのである。故に禮讓を以て國を治むるとも言つてある。而して讓は己れを損して人に讓るのであつて消極的態度である。孔子の道は老子の道の陰柔なるに比して陽剛であるとも言はれてをるなれど其陽的に進むには常に陰的に守る所を根據としてをる。爲さざる所あつて然る後に能く爲す有るのである。是れ元來東洋固有の生活敎訓である。此爲さざる所あるのが人畜の別、精神と自然の別を成すのである。此爲さざる所あつて然る後に能く爲す所の活動でなければ如何に目覺しき活動であつても皆自然的のものであるから、物盛んなれば必ず衰ふとか生者必滅とかいふ類の運命を免れぬ。勝敗强弱は相依るものなれば他を弱めることに依て自ら强くなり、他を敗ることに依て自ら勝つものは早や此轉變の運命に自ら投じたものである。世に絶對的の常勝軍はあり得

ない。爲さざる所あつて然る後に能く爲す所の活動は精神的であるから有爲轉變の相を脱出する所がある。儒教は積極的に人生を組織する教であるが其組織の根柢には否定の原理が潜んでをる。夫子溫良恭儉讓である。老子の教に至つては特に此否定の原理、陰柔の道を取り出して人に示した。是は實に至强の道である。倒さんと欲して倒すその出來ぬ所に根據を据えてをる。何となれば倒すとか倒さるるとか、勝つとか負けるとか、强いとか弱いとかいふことを超脱するからである。功成つて居らず、それただ居らず是を以て去らざるのである。勝つといふことがないから負けるといふこともない。强い弱いはあつても其强いを相手にはしてをらぬから强くて强からず弱くて弱からずと說くのである。柔よく剛を制すとは只此眞理の一面を現はすに過ぎぬ。是は只管奮鬪とか競爭と

か元氣とか活動とか說く教と、天地遙かに隔つてをる所がある。人生の道德的組織は此勝敗優劣を超出する陰柔に其根據をかねばならぬ。此柔的根據を特に取り出して見せたのが老子教である。西洋にも柔和の道を說き、無抵抗主義を教へてはをるが、洋人の氣質は自然性に富み、積極的活動に專らであり、征服欲强く政治欲盛んである。機械の心に長じて自然を征服し、欲求を滿足せしむる活動が强い。固より此種の生活力は人類に通有であり實に人生の內容材料をなすものであるが、彼等には特に强いと思はれる。此所に其長所があるのであらうが其短所も又實に此所にあるのである。自然的の活動力は有限的原理の上に立つものであるから夫の物盛んなれば必ず衰ふの理に左右せられる。斯かる元氣は枯竭の期必ず至り、斯かる活動は躓く性質のものである。亢龍悔ありと支那人は之

を言ふのである、支那人は比較的に淳朴であり、比較的に從順を好み、自ら老子の柔の敎に合ふた所が餘程ある。漢人は北人の侵擊に對しては多くは受身であり、殆ど弱を以て終始してはをるが其文化的生命は斃れずして今日に及んでをる。其代り彼等は世界的帝國は作らぬ。其廣大は自然に、其土地廣く其民多きが爲めである。夫のローマの七丘から興つて世界的帝國を建てたり、北歐の島國に倨して版圖世界に跨がる如きの侵略的大活動は、到底彼等のなし得ざる所であらう。然し彼等は富强を以て人生價値を評せんとはしない。禮讓の俗を以て眞個の人生組織と敎へてをるのである。個人としても國としても貧富强弱・大小廣狹を超出した所に積極的なる精神內容を實現せんと欲するのである。吾人も世界の五强國に伍したといふのが名實共に然るのであつたとしても、其富强が道德力から

の自然の結果でなかつたならば自ら誇るには足らぬ。又所謂强國を單に强國なるが故を以て羨み尊むべきものでない。吾人の現今の思想は餘程近代の歐洲諸民族の氣質から出た思想に影響せられて、競爭に打ち勝つとか、活動とか、元氣とか、積極的或は發展的或は進步或は又自由とか平等とか、此種の言語文學が人生の評價の標準を指示する樣になつてをる。之に反して謙遜とか、戒愼とか、溫和とか、或は分を守るとか、義理堅いとか、長者を尊び老人を敬するとか、順良・從順といふ如き言葉は時代後れ、卑屈・奴隷的・消極的を意味し、生存競爭にうち負けて滅亡の道であるかのやうに考へられてをりはせぬか。若し然りとせば是れ大なる謬見であつて、彼の短所を知らず我の長所を忘れ、徒らに外觀に馳せて却て國家長久の計を誤り、人生の正しき評價に背くものと謂ふべきではなからうか。

予は歐洲人はどこまでも榮枯盛衰の運命に左右せらるるもの、支那人は長久永續の道に由るものであると考へてをるのではない。世界の人種が左樣に兩極端に偏して其性を賦與せられてをるなどとは思はぬ。感性と理性、自然と精神の兩面はいづれの民族にも具はつてをればこそ人間といはれ得るのである。現に嚴然たる文化を實現して生活してをることが其確かなる證據である。漢人如何、歐洲人如何などの言説は拔きにして、只物の道理を研究して道德的長久の道のある所、自他を全ふする眞正の人道の存する所を究明しさへすればよいのであるが、適ま西洋人の氣質と漢人の氣質の相違と思はるる所に此點を示すに都合よき所ある故、如上の論を爲したのである。歐人がどうであらうとも漢人がどうであらうとも其に構ふに及ばず、我は我が信ずる所を行けばよいのである。されど今

日ややもすれば强弱の勢を以て諸國民の人間的價値を決する標準とせんとする傾向がある。從つて其强い西洋の思想はよい、弱くして自分の國土民人すら統一し得ない支那の敎などは取るに足らぬと早計にも考へて仕舞ひはせぬかを恐れる。人道正義は特に今後吾等が重んずべきものであつて是に依つて永遠に我邦家を維持存續するを計るべきである。人道的敎育を我子弟に施さねばならぬ。而して此人道的態度は寧ろ自ら弱を守るとも征服侵略を敢てしなかつた漢民族に見出すことが出來る。而して又此漢人は今日世界最古の生きた文化的國民である。彼等は文化的に長久なる民族である。而して彼等が人道的であるといふのは其柔なる所にある。禮讓を以て國を治むることを尊んだ所にある。吾等が國運の長久なるは畢竟吾民族が忠順・孝順を以て國民的道德となし、他國民に對

しては多くは遠慮勝ちであり、欲張るよりは却て讓るといふ如き性質に本づく所大なりと思はれる。忠孝從順の道は夫の否定の原一を包藏し、報本的であつて陰柔の理に據る所がある。此己れを空くして己れの本に反へる所から活動し出づるのが國内に於ては孝順忠順の働きとなり、之を國際的に適用すれば人類彼我共通の根源に還つて自他を全ふする人道的道德となるのである。故に自由や權利を主張することを好むものよりも、忠孝の道德に養はれたものの方が人道正義にはずつと近いのである。否只其應用が違ふのみで其精神は全く同じいのである。

力に據つて立つものは自他相抗し、德に據つて立つものは自他相全ふす。自他相全ふするは他も全ふすることによつて自を全ふすること、向ふを喜ばすことによりて己れを維持するのであるから長

久の道である。自他相抗する道に由つて進めば物盛んなれば必ず衰ふの法則に司配せられる。されば自他相全ふする人道正義の道が實に己れの邦家を長久に保つ道である。支那人をはり倒して我國を利せんと計るなどの誤つた愚かな道は日本人は取らぬのである。中心彼の利益を計り彼を喜ばすことによつて必然的に我も利する道、卽ち自他兩全の人道的態度を吾等は取るのである。覇者すら仁義を假ることを知つてをる、否そこが覇者たる所である。英米人も何にか支那人のためになることを爲して見せんとしてをる。只假るものは何時しか地金を出す。吾等は弱い支那に對すると同じい態度を以て强い侵略的な國に對すべしとは思はぬ。無抵抗主義を事情をも勘考せずにそのまま實行するがよいと思はぬ。人道正義は不正者に對しては必要あらば劍を取つて向ふことを命ずる

こともあるべきである。世に盗賊の絶えぬ以上武備をなすは道意の命ずる所である。是れは止むを得ざる道である。

されど人道の原則として吾等が次の時代に敎ゆべきことは、元來生命は自他共通のものであるから他を危くして自ら安くし、他を弱めて自ら強くするは、只暫時のことであつて結局自ら危くし自ら弱める道である。一身一家に於ても自ら増殖することばかりの一方向きならば永續せぬ。長く富を家に傳へんと欲するものは取り込むことのみを計畫せずして却て出すこと、他に讓ることを家の掟として遺すべきである。適宜に己有を減殺して之を他に讓與する法を立てをくことが家運長久の道である。

此理は一國にも通じて行はれることと思ふ。飽くことを知らずして取つた上にも取り、富み且つ強きが上にも富み且つ強からんと

してをると躓く時節が到來する筈である。力を以て立つ國民は一時は強大となつて、其國内には文藝學術等が大に興つても衰亡を免れぬ理である。長く強大を保つてをる國は何處にか自己を減損して他國の利・人類の益を計りつつある所があるべきである。支那人も汝より出づるものは汝に還へると言つてをるが、今北京の中央公園に公理戰勝紀念門といふ堂々たる建築がある、是れ卽ち過般の歐洲大戰に於て獨逸が敗れたのは公理が勝つたのであるといふ紀念牌樓である。獨逸にとつては恥辱である。斯かる念の入つた紀念物は支那人が殊更新たに作つたのではない。往年義和團の變に支那官兵が獨逸公使ケットレルを殺害し謝した其罪を永遠に紀念して長く支那人の恥辱を銘記するために獨逸人が北京の大道に建てた破壞することの出來ぬ堅固な建物を其始末に困じて戰勝紀念門

に轉用したのださうである。

偖上述の如き人道論は人道に背いて侵略的である强國に向つてこそ說くべきで、吾等の如く元來人道的であるものが自ら語る必用なきに似てをるが、正義人道といふことは近來盛んに歐米人が唱道して、日本人は大に此正義人道を歐米人に學ばねばならぬかのやうに思ふ向きもあるかも知らぬ故、眞相は却て左樣でないと思ふ所を述ぶるのである。

勿論吾等も人道的に背いてをる所足らぬ所も多かるべく、又歐米人の中にも吾等の遠く及ばざる如き人道的事業に獻身的に從ひつつある者もあらう。要は我が國民敎育と人道的敎育とは互に兩立しない所ではない、其根本は全く同一の道德的眞理にあるので、互に相勸め合ふものと思ふのである。且つ人道正義の道を敎ふることは今後に於ては國を維持する道としても益々必要なることは識者の等しく吾々に敎へつつある所である。

七、人道的教育と國家的教育

國家の其人民に於ける、教育者の其生徒兒童に於ける、親の其子に於けるは造化の萬物に於ける如きものがあつて皆所謂天地の化育に參はるのである。造化の萬物に於けるは物をして其所を得其生を遂げしめることで、これほど其廣大を極め其精微を盡した化育は無い。卽ち梅は梅として、犬は犬として、人は人として、人も東西種々の種族として、結局は人人個個として各々其生を享けてをり、決して梅と櫻、犬と他の畜類、又人も某甲と某乙と混同せられ相代はらしめられることはない。一草一木の末と雖も其時に於て其場に於て唯一無二であつて決して他に代はり又は他に代られることがなく、造化

の功は秋毫の抽象的なるものなく徹頭徹尾具體的である。國家の其人民に於けるも畢竟之を生かすにあるとは男は男、女は女、老は老、幼は幼、才は才、不才は不才各々其所を得其生を遂ぐるやうにする。賢者は敬せられ不肖者は憐まれ、能は重く用ゐられ不能は輕く用ゐられ、心を勞するものあり力を勞するものあり、强者は統御せられ弱者は擁護せられ、男女各々其配遇を得て外を治め內を治め、各々其家を家とし、其親を親とし、其子を子とし、其財產を財產とする。此間些の混亂無くして上下制あり貴賤等を異にし賢愚位を別つ等の組織が起つて國家が立ち其裡に民生を遂げる。天地の大德を生となすに倣つて人君たる德を生を好む德と古來謂つたのは抽象に亘りて物は齊しからざるやうに造られをる造化の意に背き、抽象的平等を求めんとして生活を破壞するなからしめることを指したのである。

而して此差別あるによつて萬人各々其天眞を全ふすることが出來て具體的平等ともいふべきものを得る。國家の人民に於ける造化の萬物を生育するを範とするは如斯であつて、秦誓に天地は萬物の父母、人は萬物の靈、人の聰明なるもの命せられて元后となり、元后は民の父母であると云つてあるのは、論語にも天の巍々たるに則とる堯舜の政の大なるを賛し、又後世の學者も天地不宰の功、聖人有爲の功と言へると同じやうに、皆造化を國政の範としてをる。國家の根柢たる愛生の德は人をして各々其獨特の生を遂げしめるにある。

しかし國家の根柢は好生の德であつても其が政治的組織として現はれるときは直接には造化と行き方を異にし、又異にせねばならぬ。尊德翁の所謂天道と人道の別の如きは此相違の顯著なるものでめつて、國家は直接に人間を眼中にをく故他の群類を人間中心の

見地から處理する、萬物並び育する中にも人間に有利なるものを擇んで之を長養し、其の妨害となるものを除去する。草木の繁茂するときは人間を利する草木も人間に不利なるも共に榮へる。禽獸蟲類の繁殖するときは害蟲害鳥も繁殖する。人間以外のものを取捨するのみでなく人間自身をも利用の見地からは取捨撰擇をする。刑罰の如きものは國家組織の此人間的なる所をよく示してをる。一には其不良者を改善敎化する力の不足を示し、一には世道を持する手段として其統一し兼ねる分子を除外するの已むを得ざるを示してをる。これ皆國家的統一は所與の材料を取捨して行ふ所の抽象的統一たるを免れざるを證する。國政の中最も化育に參はるべき敎育の事業に於てすら又此淘汰が行はれる、すべてをして各々其生を遂げしむる意を盡すことが出來兼ねる。

國家が自己の存立のために何等他に顧慮すべき所なく、全く天に代はつて人民を生かすといふ人道的見地に純らであり得るときすら如上の且吾を免れないのであるが、列國對峙して其間諸種の事情あるときは國家はともかくも自衛の必要上種々之れが手段を講せねばならぬ。中に就いて教育の事業も又此自衛の目的を達する手段とならねばならぬ。生存競爭を國際的に起すときは役に立たぬ足弱連を引き連れるは不利であるから此等の弱者は拋擲して秀れた部分の教育に全力を注ぐ。而して又後者の教育に於ても各々其天賦を全ふせしむるを計らずして最も有力に國家が他と爭ふに必要なる智能の習得に重きをかねばならぬ。かかる教育は人が天功に代はるといふ意義に大に背いて、却て天の生じたものを特殊の目的のために甚だしきは棄て去り、或はさなくとも所謂其所を得其

生を遂げしめぬ。然れどもかかる教育も國際的事情によつては又已むを得ぬことがある。固より不道德的なる國家主義から能率萬能の教育を施すは天に背き人を傷ける罪業であるが、國家の自衛は個人の自衛とは全然其道德上の意義を異にする故、夫の上衣を取るものに又下衣をも與ふる如き無抵抗主義を實行して國家を不正なる他の掠奪に委かせることは一二の極端なる主張者はあつても到底同意すべきことでない。オーガスチンすらも國家が武器を取つて起つは自衛上是認したといふことである。國際的特殊の事情から國家自衛の必要上其の方便として教育を或る程度まで考へることは是認せねばならぬ。然れどもかかる意義の國家的教育が夫の萬物並び育てられて相悖らぬ造化に則とる人道的教育、賢者も不肖者も強も弱も、國家的能率の大小如何を顧みずに、各々其所を得其生

を遂ぐるやうにする教育と且吾するの已むを得ざる如きことあらば、是れ只特殊の國家の罪ならず實に國際的干係の宜しからざるのである。國際的干係の宜しからぬは世界の文明の其性質よろしからぬものが優勢なるからである。今日各國が經濟的に相戰ひつつあるは產業的文明が優勢なるためである。而して經濟的に優越となつて自衛を維持せんがため國家の教育は過多に功利的內容を含む、能率增進の教育は卽ち是である。これ國家存立上已むを得ぬことであつて、道德上是認せざるを得ぬ。

然かし列國と相對する間にも國內では個人をして各々其天眞を全ふせしめ、弱小なるものもそれ相應の生を遂げるやうに教育することは餘程の程度までは出來、又現にいづれの國も之を實行しつつあつて、不具者、低能者の特殊教育の如きも興りつつある。しかし此

點について政治家と教育者と多少其態度を異にする所がある。善い意味の政治家的教育者も動もすれば國家存立の一點に餘りに執着して、個人を顧慮し人道を考へることが自然に薄くなる。純乎たる教育者の心事は不良低能なる兒童のために萬斛の涙を濺ぐ所にある。此點に於て教育者は宗教家に近く、或は又人の子の親に近い。宗教家は特に愚痴なるもの、罪業深きものを深く憐れみ、善人往生す況や惡人をやと說示するのである。自ら(おのづか)に善良なるものは固より愛敬すべきも實は幸運なるものである。不良邪惡の徒は遺傳か境遇か或は自業自得か、いづれにせよ世に不幸なるものである。而して國家は之を刑し社會は之を擯斥して廣き世界に身を容るる地無きときも獨り父母は之を我家に容れ宗教家は之を造化の本土に導かんとするのである。萬物の父母たる造化と我が生みの親とは如

何なる惡人も見棄てぬ。慈悲の力には惡魔も反抗することが出來ず、遂に心〻和らぐとしてある。淡窓翁曰く父母の其子に於ける賢なれば之を愛し不肖なれば之を憐れむと。而してこれ又實に純眞なる敎育家の心である。此心を以て物を統一するのが最も具體的統一であつて、凡そあるほどのものは一として其攝取に洩れるものは無い。所謂攝取不捨である。これ只物を生むものの能くする所である、萬物の父母たる天と人の親とが能くする、而して宗敎家、敎育者は又此心を以て己れの心とするのである。若し物を目的そのものとして、スピノザの謂ふ永久の相に於て、取扱はずして、何等かの目的への手段として取扱ふときは、たとへば其が國家存立の目的のためであつても、造化の意には副はぬのである。

しかしかかる意味の人道的敎育と國家的敎育とは不來一致せぬ

ものであるといふわけでは無い。本來一致してこそ人生の統一は行はれ、造化の意も遂げられる。此所に人道的といふは超國家的といふ意味ではなく、各々其所を得其生を遂げて特殊の天賦を全くし、決して他の方便となり他の代はりとなり他に代はられるものないを指すのである故、萬國各々其獨特の國家を立てて其特殊の文化の裡に更に個人々々の特殊性を發せしめるのは却つて最も人道的である。理想としては國家的敎育と此所に謂ふ人道的敎育とは全然一致する。此理想は人類の文明が其眞實なるものに達して、夫の經濟戰爭の行はるる國際的狀態を脫出したる後に實現せられる。產業的文明といふ如き低級文明が高尙なる理想主義の文明の統一の下に齎らされて、主と從との關係が順當となれば、各國家に於てそれぞれ人道的敎育を施すことが直ちに國家的敎育となる。

然るに國家自衛の必要以上に國民が功利を重んじて教育を功利實現の具に供し、個人は又教育を單に自己の便宜を得る手段と視る如きは國家的教育の本意にも背き、人道には猶更に背く。凡そ農具を手に執つて土を掘り、地下深き炭坑に入つて石炭を掘り、或は石を割り土を塗り木を削り、或は汽鑵の火夫となる等此等種々の勞働に從事するものなければ今日社會的生活を營むことが出來ぬ。且つ此等の業に從事するものは最も多人數たるを要する。此等の業務の社會的生活に於けるは建築に於ける土臺の如きものであつて、中には地中に築かれて人目に觸れず然かも實に全建築を載せてをる最も大切なものがある。世上の所謂文化生活とは多くは却て彫刻或は色ガラスなどの裝飾品の如きものであつて、床、屋根にすら相當せぬものが多く、夫の土臺が動搖せば忽ち崩壞するものである。文

化生活も勿論社會的生活である以上、石炭掘り、火たき、車の後押し等の生活に欠ぐべからざる仕事も包含してをらねばならぬ。如何なる教育手段によつて如上の勞働を所謂文化的たらしめるのであらうか。勞働時間を短くし、其餘暇を以て美衣美食し或は音樂を聽き演劇を見せしめるやうにするのが其解決であるとは思はれぬ。曾てペヤソン氏が社會すべての人が悉く半日は往來の塵の掃除、下水道の汚泥の浚へなどに從事し、半日は最も高尚なる智的業務に從ふやうになるのが理想的社會であると言つたが、人間の平等を機械的、抽象的に考へゆけばかかる結論に陷るは當然である。人間が其抽象的思惟を餘り憑まずに、寧ろ造化の手から受取つたままに事物を取扱へば却て解決の道が開かれるかと思はれる。力を勞するものは人を養ひ、心を勞するものは人に養はれるは抽象的思想が考へる

如くに忌むべき人類不平等であるのではなく、却て造化の本意である。而して此間に自ら各自其所を得其生を遂げて共に天眞を全ふする具體的平等がある。かかる境涯にまで人を敎育するのが道德的敎育又は宗敎的敎育である、卽ち夫の人道的敎育である。若しペヤソン氏の如く考へるならば賢愚、强弱、才不才、男女老少さまゞに人を造れる神を呪ふ外は無い。若し又人間の平等と文化とを誤り考へて、たとへば將來義務敎育の程度を今日の中學校敎育位にまで進め、かくて全國の中學校數は今日の小學校數ほどに增し、國民は十八九歲までは義務敎育を受けねばならぬことになり、而して又中學校敎育を今日の大學敎育位にまで進め、かくて全國の大學の數は今日の中學校の數ほどになつたとして、果してよく石炭掘り、土掘り、火たき、車の後押しが尙ほ必要なる多數だけ得られるであらうか、或は

右の如き敎育の所謂進步によつてかかる勞働は悉く或は大部分機械によつて代はられ得るであらうか。恐らく敎育が右の假定の所に迄所謂進步する以前に社會は其建築の土臺を失つて崩壞して仕舞ふことであらう。現今の勢を以て且つ現今の方向を取つて進みつつある敎育が此勢と此方向そのままでどこまで進むのが理想であらうか。於是吾人はたとへば夫のミレーの畫に、夫婦の農民が廣き田畝の眞中で遠寺の暮鐘を聞き、農具を其所に捨てをいたまま相向つて合掌し天父に感謝を捧げつつあるやうに見ゆる光景を思ひ浮べて、力を勞して終日土を掘る生活にも天地の悠久に與かることの出來る境涯の可能なるを思ひ、且つ此境涯は只所謂文明的諸設備の齊へる便宜の生活、音樂を聽き文學を讀む生活とは天地の相違あつて、これこそ眞の文化といふに値いすると考へざるを得ぬ。敎育

を此所にまで進めることは固より至難のことであるが、之に達することは等しく困難であつて且つ元來誤つて考へられた理想に向ふべきでなく、正しい此方向に向つて努力すべきはいふまでもない。換言せば、身は所謂卑しき勞働に從事し、衣食住の簡素に甘んじ、心は貧しくて、然かも忠信質撲、常に天地の德に感謝し自(おのづか)から造化に冥合する如き輩を大多數に敎養するのが國家としても人道から見ても敎育の眼目であつて、只學校の學科を高かめ年限を長くして徒らに所謂智識を博くし趣味を高尙にし或は身體を强大にする如きを理想とせないのである。

又孟子は天下の英才を得て之を敎へることを君子の樂の一に數へてをるが、孟子の如き大賢が世の木鐸ともなるべき俊傑を得て道を傳へんと希へるはふさわしき限りである。又孟子たらずとも學術或は道德を以て自ら任ずる者が一國文化の支持者發展者たるべき秀才の敎養に專念であるのも當然である。國民の普通敎育に從事し、特に自ら普通の敎師でありながら秀才敎育などと言ふは烏滸がましく聞える。數倍の希望者の中秀才を選拔して入學せしめ、然る後尙ほ多數の落第者退學者を出し、而して最後に優秀なる卒業生を得る如きは敎育の事業これより易きはない。如斯は抽象作爲の甚だしきであつて、すべてのものをして各々其所を得其生を遂しめる造化の意に背き、眞正の敎育に反する。國家が自衛上かかる敎育を施すこと必要なりとせば、これ國際的生活と世界文明との罪であり、其必要なきに猶國家之を行ふならばこれ國家の罪並に社會一般敎師個人の罪である。斯程の抽象ではなくして、只普通に整へる設備の下に普通の少年青年を敎育して能く良成績を擧げるものは相

應の苦心をなしたるべく、世上の譽れもあることである。孤兒或は貧兒或は不具遲鈍なるもの、或は不良邪曲の少年の師父となり、勞して其效少なく、功績世に認められず、しかも尙ほ彼等をして其生を遂げ天賦を全ふせしめんとして勉めて倦まざる如きは人の最も難しとする所であつて、而して敎育の眞の精神は此邊に見える、榮譽は當代に得られずして却て百世の後に其精神が傳はる。

八、國民敎育の方向

一

事實をありのまゝに述べるのとその事實が善い惡い尊い卑しいと思つたりいつたりするのとは學術の上では區別しやうとして居るものもあるが日常生活では一所になつて居る場合の方が多い。吾人の日常の言葉も感想も兩者をそんなに別けては居らぬ。大小强弱と言へば事實を述べると同時に何となく大を尊び小を卑しむ氣味を含んで居る。適者生存優勝劣敗といふはもと只生物界の事實をありのまゝに述べた積りであつたらうが、それが處世の上に道德の上に善惡取捨の標準を示して居るかのやうに通常考へて居る。

生物界の事實としては右の言葉は單に「强いもの勝ち」といふことをいひ表はすに過ぎない。その强いもの勝ちといふことが直ぐに弱肉强食といふ禽獸道ではなくして、たとへば大沙漠に生える小草が數十尺の根を下ろして深い土中から水分を取つて生存するのは適者の道强者の道であるとしても、人間の吉凶榮辱善惡眞妄の標準であると卽斷する譯にはゆかぬ。併し人間の意義について退いて考へる處がないと生存競爭優勝劣敗がすぐに吾々が一生を渡るについての指南車でもあるかのやうに思ふ。現代生活は此思想に內々大に左右せられて居る。富國强兵とか世界の强國とかいへば只あるがままの事實をいつたばかりではなく又大に羨望すべきことであるといふ意味が言外に溢れて居る。吾國が列强の仲間入りをしたといふことを誇つてそれで尊敬すべき國となつたと思つて居

りはせぬか、支那戰國のとき秦は一番の富國强兵であつたが支那の歷史家は秦が一番尊いとはいはぬ、三國のとき魏は最も强大であつたが矢張り一番尊ばれては居らぬ。英米や獨逸が世界の優秀なる國であるといふのは如何なる事實を指すのであるか。彼等は攻擊的本能に富んで他民族の國土を大に略取して居る、其力と智識に於て遙に彼等の所謂劣等民族を凌駕して居る。アフリカ、南米、亞細亞、南洋等世界到る處に領土を擴げて居る、其結果此等被侵略者は其固有の土の主人たる事を失つて、或る者は人口次第に減少し、或ものは其傳來の習俗を破壞せられ、其祖先以來の信仰に代ふるに侵略者の齎らせる宗敎を强られ、或は其慣れ來つた仕事を離れて、新しいさまざまの厭な仕事を課せられて居る。其新しい仕事は侵略者が富源の開拓と稱して世界の諸所で天然を破壞して物資を製出するため

の所謂文明的仕事のことである。其製産せられた物資は悉く侵略者がいよ〳〵益々侵略を逞くする武器たる富を養ふものとなるのである。而して彼等は又かかる所業を我先きにせんがため相互の間に大爭鬪を起した。これが先達ての世界大戰の主原因であることは彼等自身の中にも知つて居るものがある。もしも盜賊どもが互に相排して自分のみ多くの財を掠奪せんがために内輪で喧嘩を起し相傷き流血の慘を見たらば餘所の見る目も氣の毒であり又は天罰であるとか卑しい爲體であるとかいふのであらう。勝つたとて褒むべきでない、負けたものは猶更醜い。若し歐米諸國は世界の强國である、優秀なる民族であると讃歎するのが、かやうな點を指してゞあるかと問へば誰も少し躊躇するであらう。かやうな意味での世界强國の列に加はつたといふことなら吾々日本人は省みて自

ら耻づる。

二

國内で力と智識とに於て勝れたものが劣つたものを壓倒屈服せしめて所有と權勢を握るのを崇拜せないならば、國際間でも其人生評價は同前でなければならぬ。併し近來此西洋輸入の生存競爭とか適者生存とかいふ類の言葉が恰も直に人間生活の値打を示して居るかの樣に考へて、其所謂「生存」とは如何なる意義内容の者であるかを反省せぬかの觀がある。そこで奮鬪とか元氣とか發展とか主張とか積極的とか總て此等積極的意味の言葉が頻に用ひられて、夫が同時に人生の進むべき正道順路を示して居るかの樣に聞えて居る。明らさまに道德的なる標語としても獨立自尊とか進取の氣象

とかいふことが重寶がられて、「恭儉己を持する」とか「爲さゞる所あり」とか「守る所あり」とかいふことは時代後れとか弱いとか考へられて居る、何故にかうなつたのであらうか。

世界は今や産業主義の大迷妄に陷つて居るといつた西洋人があるが、此インダストリアリズムといふものは人生に如何なる價値あるものであらうか。産業主義の行はれる所に帝國主義が行はれるので、軍國主義は只其道具の一つに過ぎない。帝國主義、侵略主義の大本は産業主義であつて、軍國主義ではない。此産業主義が熄まねば弱肉强食の意味の生存競爭は熄まぬ。武器で戰ふことを止めて居る間は經濟戰爭をする。兵で戰ふも、富で戰ふも、其戰ひたるは一である。此産業主義大發達の原因は自然科學的智識の發達である、科學を應用せねばかゝる廣大なる産業は起りやうがない。科學な

るものは人間に莫大なる恩澤を被らして居る、それと相並んで又大なる害毒をも齎して居る。藥になるものは毒にもなり、毒はまた藥にもなる。實に人は藥を珍重して知らず〳〵其毒に耽溺するのである。

西洋の文明は機械の心に長じて自然の征服に專念である。併し自然の征服を人間の特權と思ふは間違である。禽獸は羽毛爪牙の類で自然を征服する代りに人は智識を以てする迄で、征服する武器が違ふに過ぎぬ。征服して己の用に供することは同じである。自然を友とするこそ人間の眞の特權である。科學智を發して産業盛となり、産業盛にして富增加し、富增加すれば富を用ひるに忙しい、此時富に用ひられざるもの稀である。人は其用ひるものに用ひられ、其樂しむ所は卽ち其耽る所である。又富めば富むほど其富める資

本を投下する場所の競爭が起る。競爭すれば如何ほど富みても足るといふことはない。そこで經濟戰の次に腕力の戰ひが來る。こゝに又例の科學が其毒力を逞くする。リエージを破壞する砲彈や恐ろしき毒瓦斯を作つてくれる。科學的智識なかりせば歐洲戰亂もあれほどに人命を奪ひ文物を壞ることはなかつたであらう。さて又毒瓦斯を作れば之を防ぐ道具を科學が考へる。飛行機で襲へば其れを擊落す機械を案出する。優勢を占めたと思ふはつかの間ですぐに互角の勢ひに還るからまた〳〵一歩先んずる工夫を凝らす。恰も濕疹などを患ふものが痒いから搔く、搔けば益々擴がつていよ〳〵痒く且痛い。而も搔かずには居れぬ、遂に皮膚潰亂し膿血が流れるに至る。是が歐洲戰爭の流血の態である。禍の本は科學を人生の主人とするにある。智識と力は人生の奴僕となり道具と

なつて始めて善の世界の要素となるが自ら人生の主人公とならば人生を破壞する。征服慾は己自身を反噬する性質のものであるから、其爪牙となる智識と力とが强ければ自己を毒することも從つて甚しいのである。重寶なもの、有用なものと思つて之に驅つた科學智と產業主義は虎であつた。外は經濟戰爭と軍備擴大に苦しみ內は勞資鬪爭に惱む現代諸國民は騎虎の勢將に不測の淵に趨らんとして居る樣子がある。軍備制限を相談したり或は國際聯盟等を考へて居るのは徒らに此眼前の苦痛を免れんともがくもので、未だ眞に禍根に氣付かざるかのやうである。英國邊の或識者が我が英國の如き强大國が先づ第一に自制せねばならぬ、强からんが上にも强く富める上にも富まんとする列强の顰に倣ふを止めて、かへつて今日の我が領土に屬する諸民族に漸次自由と獨立を許すやうにする、

自國の存立を傷けざる限り强國が率先して其强大を劃るは世界平和の道であるといふやうな意味のことを言つて居るが、これは稍病根に氣付いたものである。併し大勢の赴く所は生存競爭優勝劣敗の標語を掲げて無暗に進むにある。國際的に固よりさうであるが國內でもさうである。そこで適者生存とか進取とか發展とか優生學とか奮鬪とか元氣とか或は獨立自尊或は發明發見或は創造獨創或は自由或は美などの言葉が人生價値を指示するものであるかのやうに考へ且行はんとするのである。眞に人生として價値ある積極的は只消極的否定的の上にのみ建設せられることを忘れたかのやうである。爲さざる所あつて然る後に能く爲すあるといふ意味を解せぬかのやうである。

三

今日は各國とも敎育は盛である。財產慾などは獲得本能であつて敎育は創造本能から起るといつて且同時にそれは卽ち一は斥くべく、一は尊ぶべきものなるを意味すと考へて居るものもあるが、財產必ずしも惡でなく敎育必ずしも善とはいはれぬ。今日の敎育の大部分は功利の學を授けるにある。征服慾を滿足させるに必要な力と智識は敎育によつて養はれる。凡そ科學的智識といひ技術といひ能率といひ其外衛生とか體育とか今日敎育事業の內容の主要部分を占めて居るものは悉く人材卽ち道具として役に立つべき人間の敎育であるが、此人材は藥にもなれば毒にもなるから、此材を正善の方に用ひる精神を養ふことを眼目とせねば、敎育の繁榮は生存

競爭を益々激しくすることにもなる。力と智識を崇拜して善を尊ぶことを知らざる野蠻の俗を脱せざる以上、敎育が盛であるといふは、個人は益々一身の榮達の道を開くに拔目なくなり、一國は益々國際競爭に勝を制するに汲々たりといふことになる。固より列國對峙の際よく競爭に堪へて自國を維持するは最上の任務であるが、それには他に大に根據あつてのことである。

優勝劣敗は生物界の法則であつて、其まゝ人間の法則ではない。國内に於てのみならず、國際的にも强は勝ち榮え弱は敗れ亡ぶは禽獸の道であつて、强は弱を扶け優者は劣者を擁護敎導して、强弱優劣各々其所を得、皆其分相應の生を遂ぐるやうにするのが人間道である。自然界では强は榮え弱は衰へるであらうが、人間界では善は榮え惡は亡ぶべきである。敎育が各國に益々盛であつて國際競爭愈

愈激しく、强は互に相鬪つて互に傷き弱は又强の餌となるのは只能率增進體力智力の敎育であるからである。敎育が尊いといふには人生價値について反省して其上に建てらるべきである。此反省の上に人生を統一するのが文化である。文化の意義を明確にした上でこそ敎育の盛も喜ぶべきである。

次に近來盛なる經濟問題も亦敎育と同然、文化の意義を篤と知つた上で眞の解決が出來る。或は經濟問題の解決が、取りも直さず社會問題の解決なりと考へて、衣食足つて禮節を知るといふ。衣食豐富の中から禮節が生えて來ること恰も水田に稻が生ひ出づる如しと思ふは、自然的發生と精神的創造とを辨へぬものである。衣食足つて禮節を知るのは、禮節の畑地に於てのみのことであると氣がつかぬ。人は足元を忘れ易い。富の分配が平になるといふこと自體

に何の意義價値があるか、勞働者が多くの賃銀を得るといふこと自身に何の人生向上があるのであるか。否此等の經濟問題解決には一歩々々裏面に道德力が働いて居るので、此裏面の統一力を離れては經濟問題といふことすら起りやうがない。道德の上にのみ經濟自體が成り立つて居るに氣付かずして、甚しきは經濟の上に道德が成るかのやうに考へる。人は又足元を忘れて居る。

私が文化といふのは軍國主義と稱せられるものに對して軍さは厭やである平和が樂しみたい藝術文學などで人生を充たしたいといふ所謂文化主義のことでない。吾々の肉體は切れば血が出る。人生は噴火山の麓に建てられた村落の如きものである。蓮華が紅爐の上に開くといふが、文化の花は恐ろしい毒物の裡にのみ咲くものである。見よ人間の藝術は金石に或は紙帛に、花顏玉貌を現して

之を萬代に傳ふることが出來るが、造物主は只之を瞬時に潰亂腐敗して鼻を蔽はねばならぬ生身の上に現はす。且善惡すら越超して無上の悅樂を覺えしむるほどの此絶世の美は、同時に又傾國の美ではないか。神の藝術ほど人間に危いものは無い、山海の珍味は一瞬にして胃を破り命を奪ふ底の毒物に轉ずるものから出來て居る。若し毒を恐れたら珍味を失ひ、傾國を恐れたら美を失ふ。

既に人生といふが凡そ生きたるものは皆腐るものである。腐つた極又清らかな生が萠え出る。腐るものでなければ生を養ふことは出來ぬ。人生は藥と毒の交互の間に成り立つて居る。其藥は神の愛、其毒は神の怒である。「神の怒から神の愛が生れる。」愛が又怒に轉ずる。只其毒を毒とし其藥を藥とするのが人生の統一卽ち文化である。色慾の害毒は甚大であるが、さればといつて色慾を絶て

ば人生は滅亡する外はない。人生を傷つける大毒が又人生存續の靈藥である。又此の毒の中に貞操の花が咲く、慾があるから貞操がある。慾の缺けたものは邪淫をせよといつても能くせないのであるから、せぬといつて褒めるに及ばぬ。戰ふ本能は人生を破壞する恐るべきものであるが此本能を絶てば人生は死人の島に化して仕舞ふ。吾等朝夕の生活が悉く一種の戰ひであり、一生は長き戰ひであるとも見られる。要は只此戰ふ本能を何れの方に向けるかにある。

四

人生は修羅道に墮してはならぬが、微妙の音樂のみ常住に響いてゐる天堂は其願ふ所ではなからうと思ふ。若しや軍さを厭うて平

和にあこがれ藝術文學等で人生を充たさうと思ふ文化主義は斯樣な空想に耽つて居るではなからうか。怒から愛が生じ愛が怒に轉ずる樣に、神の造つた人生には戰ふ本能は身を守り國を護り人類を保ち、かくて善を進め惡を退くる靈力である。若し退くべき惡なきに至るやうなことがあつたら最早人間界ではなく天上界である。戰鬪の眞最中には恐らく極樂世界の笙歌の妙音にも勝さる人間美、人間の德、人間の偉大が現れることがあるであらう。腐つて毒となるものゝ中に神は相變らず其藝術と美を創造しつゝある。その妙音の如きは恐らく腐る患のない石に刻んだ人間の藝術の類ではなからうか。

世界諸民族の中で恐らく最も非侵略的である漢民族の歴史に於て周代は最も文を尚んだ。其文なりし周の文物にも尚儼然たる武

備があつた。孔子も文事あるもの必ず武備ありといひ、忠恕一貫の道を奉じた曾子も戰陣に勇なきは孝にあらずといつた。人生の最深統一たるべき文化が文武の兩面を具するは當然である。軍事を拔きにした文化主義ならば人生を統一するに足る文化ではなくして、その產業主義から興る帝國主義、其帝國主義の道具たる軍國主義の弊を厭つて、他の極端に走れる一偏見と思はれる。

科學も產業も富も皆可である。生存競爭も必ずしも呪ふべきでない。只科學萬能、產業主義、經濟萬能は非である。人生規範として生存競爭は斥くべきである。科學、產業、富等は毒藥であり得ると共に靈藥ともなる人生內容である。生存競爭は一面から見た人生內容其物である。凡そ此等を除けば人生も亦空しくなる。大害毒を流す科學的智識ではあるが科學的研究には人間の高尙なる德が働

き、人間を單なる生物に墮落せしめることある產業や富であるが產業や富への努力の中に人間の尊ぶべき精神が現れ得る。要は態度の如何にある。且智識や富は又人生を潤澤にする慈雨ともなる。固執して是非とも斯うでなければならぬといふものもなく又是は必ず惡いといふものもない、皆人生の材料である。

近來流行する何々主義といふもの程拘泥したものはない。如何に善ささうなことも一たび主義となれば皆害をなす。文化は人生の材料そのまゝでなくそれを統一する形式の上に成る。戰ふ必要多ければ軍備を盛にする。富む必要多ければ產業を盛にする。文學藝術が如何に美であつても之を修むる閑暇なきに强て之を重寶かれば却つて人生を壞る。物は皆其所を得ざれば文化の要素とならぬ、而して絕えず流動する人生にあつては物それ〴〵の地位は變

るべきである。事あるときの軍國主義は無事の時の平和主義でなければならぬ。同じ精神の面てを換へたに過ぎないのに、主義といつて凝るから兩立しないやうに誤り考へる。國貧なれば產業主義、國豐になれば文藝主義とせば兩者必ずしも人生觀の相違ではない。主義といふは只其場々々に人生統一上適當なる立場であるべきなるに萬古不易の眞理であるかのやうに思ふ。故に主義の標榜は悉く一種の挑戰である。文化そのものは無主義なるものである。無主義であるから如何なる主義も適宜に容れる。

五

主義なるものは現代に於てのみならず古來多く行はれて最も人生を毒した。頭が機械的に働くのと我執の强いのとから起る。如

何に立派な又包容的な主義でも之を固執すれば悉く害である。宗教、道德、政治等文化の精華といふべきものが皆この主義の弊に陷つて居る。釋迦孔子の如き大聖の敎も世界諸民族を總ての時代に亘りて一樣に統一する譯にはゆくまい。曾ては英國の政治を理想模範と歐洲諸國民が仰いだ時代、フランス文明が人類の眞文明であるかのやうに思つた時代もあつた。今日では米人が米國的デモクラシイを世界に推し及ぼさうと考へて居るやうでもある。全人類を英國式にする、米國式にするとは、文化の本質に背戾する何たる野蠻的の考へであらうか。民主制がよいとか君主制が惡いとかいふは菊は此地上から絕滅せしめて薔薇のみ榮えさせよといふのと相去ること遠くない。米國が米國流にやるのは米國主義といふものではない、只何ともない眞理である。之を世界に布かんとするとき米

國主義となつて忌むべく斥くべきものとなる。併し此主義なるものが今日非常に多くなつたのは私の想像かも知らぬが科學的思惟法が餘り萬能的に一切の問題に用ひらるゝからであると思ふ。

十九世紀獨逸のロマンチシズム哲學の盛時には思想が硬化せずに融通無礙の趣が餘程あつたやうに思ふ。それで文化の素地原料として國土の情勢、民族の氣質の相違を顧慮し、從つて家族的生活及民族國民の歴史が尊重せられた。國民は其國民的個性を、個人は其個人性を、有事は其有事の特色を、無事は其無事の特色を、貧時も富時も各其特色を、それ〴〵さまざまに主張するのが卽ち無主義である。一を固執して自餘一切を律せんとするのが所謂主義である、死物的である。米國の政治には藥であるものも支那の政治には毒となる。是皆主義の弊害である。或はいふ、併し長を採つて短を補ふことは

よいではないかと。是が又近來好んで用ひらるゝ言葉である。併し是は人生文化の如き生きものに適用すれば頗る不都合のものである。諺にも鶴の嘴を切つたり鴨の足を延ばしたりすれば悲しむであらうといふ如く、生きものに繼ぎ足しは出來ないのである。若し日本人が諸外人の長を採り短を補ひ、又諸外人が互に他の長並に日本人の長(何となれば日本人は短ばかり有つて長を有たぬといふことはない筈であるから)を採つて、各自の短を補ふ時(何となれば採長補短は日本人のみに對する勸告ではあるまいから)、其總結果は世界一切の民族が悉く互に其長所を相提供して悉く之を己に採用するから、何れの民族も世界中の民族の長所を殘らず有つ、つまり民族の相違は失せて同じものになつて仕舞ふ。かゝることは出來るとしても望ましいことではない。又出來ることでもない。

六

生活の外部のことは便宜を計つて他に倣ふも或點迄は可からうが、若し世界中が洋風の建築となり洋服となり洋食となつたら却つて人生は殺風景單調となるであらう。他の長を採り己の短を補ふのではなく、あくまで自己の持ち前を發輝すればそれが卽ち長を發し短をなくする唯一の道である。人類一般的の長短の標準といふのはないのである。物各々自己の性に照して長短といふことが出來る。故に固有の性を極度に發達させることが短を去つて長を成すことである。生物界から類推して見よ、凡て獸の足は長かるべしとか、凡て迅速に走るがよしとか、すべて花は長く咲いて居るがよいとか、すべて八重がよいとかいふ一般的長短の標準ありや。却つ

て長短の標準は各々自身の裡にある。櫻は早く散るがよく、梅花は長く樹頭に止まるがよい。日本人の髮は黑いが西洋人のは黃金色がよい。況んや其心性性情に至つては結局個人自身の中に長短の標準を具する。人の振を見て自ら勵むといふはよいが、さなくば所謂採長補短もかの現代の機械的思想の一例たるを免れない。

散ればあくたとなるもので花が出來る如くに、醜陋汚濁人生を紊亂する煩惱の上に宗敎道德の光が現ずる。人間はあくまで生臭いものである、其裡に文化を咲かせやうとする宗敎道德の努力は險阻である。慾があるなら切り捨てゝ仕舞へよといふ譯にはゆかぬ、人間其物を殺すからである。軍さは野蠻である、藝術學問は文明であるといふが、戰亂の風雲をも捲き起す人慾、其人慾の狂瀾怒濤こそ正に藝術の對象ではなからうか。最上の文藝たる悲劇は平和なる笙

歌が永遠に響く天堂では考へられぬ事である。吾々は軍備のため奔命に疲れて居るかも知らぬが又一面敵國外患無ければ國常に亡ぶといふ言葉も多少考へねばならぬ。莫大なる軍備が不用となればる敎育文藝等に悉く之を向けて平和なる文化の理想界が近づくと思ふも空想ではなからうか。泰平に醉うて民族は墮落しはせぬか、流れに浪の起れば水が腐らぬ。現代の諸國民は大に富んで居るが此富のために腐らぬだけの道德力が富の增加と平行して發達して居るであらうか。軍備に緊張して居るのは又吾々のために一種の藥でもある。

道德の地の下には直ぐに劫火が燃えて居る。故に徒らに文化主義とか軍國主義とか、產業主義民衆主義とか互に主義を戰はして居るべきではない。宗敎道德が人間社會を支持して居るのである。

生物界を人間界にするものは倫理的統一の力である。國民の道德さへ堅實であればあらゆる主義は皆適宜に用ひられ統一せられて眞の文化の要素となる。主義を戰はすよりも今一層國民の道德敎育に力を入れるべき時である。道德といふ別の生活が人生の一部分としてあるのではない、あらゆる生活方面を深く統一したものが道德であり文化である。卽ち毒を轉じて藥となし、塵埃の裡に美花を咲かすのが宗敎である。道德敎育を忽にした敎育は力と智識の養成卽ち藥にも毒にもなるものの製造に過ぎない、材として道具としての人間の養成であつて、主人としての人間の敎育でない。科學の奬勵も體育の奬勵も其他百般の技能の修業も皆之を正善の方向に用ひてゆく正しい心の主人公を豫想してゞなければ無意義である。勞働者に道德敎育を施さねば彼等の賃銀を多くすることは彼

等を墮落せしめ風俗を害するに過ぎない。藥にも毒にもなるものである所の富を公平に分配するといふことに何の正義何の文化的意義があるであらうか。

七

私はさきに歐米の强大を呪つたやうに聞えるかも知れぬが、只の力の崇拜を斥けるのである。强弱卽ち正邪、大小卽ち善惡ではない。併し凡そ一國の隆昌には必ず裏面に道德力が働いて居る。彼等の强大の源由を調べねばならぬ。道德を失つて長く强を維持することは難い。曾てはアイデイアリズムの榮えた獨逸がビスマークの如き人物に率ゐ導かれたのは今日の失敗の原因ではなからうか。徒らに成敗によつて價値を斷ずべきではないが、ベンサム・ミルの

功利主義には深い道德心が籠つて居る、マコーレーは印度商社員の任用試驗に古典學を以てすることを提議した、セシルローズは古典の奬學資金を大學に寄せた。今回の大戰後の敎育方針として古典飜譯所を建てることを計つて居る。英國の敎育が道德を中心として居ることは今に初まつたことではなからう。只力を以て立つものは盛衰の運命を免れぬ。道德が長久の道であるのは、道德は他を全うすることによつて自ら全うする道であつて、存續の理に適つて居るからである。家運の長久は代々道德を失墜せぬからである。只管富めるが上にも富み强きが上にも强からんとして、他に施し他に讓り他を全うすることを顧みぬものは顚覆する。一國にあつても同樣でなければならぬ。一國民が國家を建てる原動力には善惡さまざまの要素が籠つて居らうから、之を察して只の强大を崇拜せざ

ると共に其潜める道德力を看過してはならぬ。吾人が世界の大國として之を尊敬するのは、其よく小國を保全し、其住民の習俗を重んじ、其特有の民族性をそれ〴〵發達せしめるやうに盡力するにある。さなくば强大なりとて毫末も尊ぶに足らぬ。

偖歐米の强國に其强なる所以の道德力ありとせばそれは固より彼等の歷史文化に由來するものである、輸入したものであり得ない。文化の輸入といふことはある筈のものでない。天の賦與せる性の中から生き〳〵として現れ出づるのである。精神や魂を他から輸入するといふことはない。民族性は人爲ではなく大自然の業である。大自然が與へた生き〳〵したものゝ上にのみ文化とか道德とかいふものが實現せられる。我國が果して列强に伍したとすればそれは西洋文明輸入の結果ではない、實に近く德川時代に養はれた

國民的道德精神の業である。遠くは建國以來の歷史の力である。文化を建てるものは各國特有の精神である。若し吾等が今日强ひて主義といふものを標榜するならば忠孝主義より外の主義はない。

併し日本人が忠孝主義であるといふのは實は所謂主義ではない只自づからの眞理である。米人が米國流のデモクラシイで進んでも米國主義といふは適當でない只當り前のことである。若し忠孝とかデモクラシイとかいつて之を世界すべてに押し當てやうとするとき始めて忠孝主義米國主義が忌むべきものとなる。吾々が人道正義の國際的道德を現すは只忠孝による外ないことは米人が只其「平等の權利及義務」の國民的道德によつて人道正義を全うする外ないと同一である。吾人の忠孝なるものは他を全うすること他に讓ることによつて自らを全うする精神であつて、之を國際に適用せ

ば正義人道となる。

九、國民教育即人間教育

一

教育に關する學はいろ〳〵あらうが概括して之を教育學と言つてをく。此教育學は米國的教育學獨逸的教育學とは言はずして人類一般に通ずる教育の理を論ずるものとしてあるので教育學に國民的色彩を標榜しはせぬ。米國人が著はした教育學書は米國人の教育のみに適用せらるべき教育學であるとは言はぬ。勿論吾々も獨米諸國人の手に成つた教育學を我邦の教育にも通ずるものとして學んでをる、教育學は人類一般に通ずべき教育の理を明かにするもの、人間教育に就いての學であると見るのである。然るに國民教

育といふ言葉が少くとも我國にはあるがこれは人間教育の外に特に國民としての教育があるといふ意味であらうと思はれるが、若し人間教育の外に別に國民教育といふ如きは無といふ意見あらば其は今暫く措いて別にこれありとすれば此種の教育の研究には夫の一般的教育學以外の教育の學が必要であるであらうか或は只所謂教育學で國民教育のことも説明し得るといふのであらうか。或は人類共通の教育の理は教育學で論じ國民教育のことは國々で別に研究して、かくて教育學に兩樣あるべしといふことになるであらうか。

歐米の教育學が米國的教育學獨逸的教育學などゝ標榜せず、人類共通の教育學なるは言はずとも知れたことゝ言ふやうになつて居るのは當然のことであつて、倫理學の如きも又哲學の如きも同前である。しかし其れであるから國民的特色がないのではないと思は

れる。又國民的特色があつたとて一般的の教育の理が其中に見出せないのではない。國民的色彩の稀薄であると見える數學又は自然科學にも矢張り特色はあるらしく思はれる。そこで歐米の教育學を學んで國民教育に資するとは如何なることになるであらうか。

教育學はたとへば身體の營養には脂肪若干量蛋白質若干量入用であり又其等を如何樣に供給するが適當であるなどゝ凡そ身體に必要なる營養分を分析し其を最も有効に與ふる方法を講ずる學に似てをる。實際吾々は脂肪を飲み蛋白を食つて活きては居らぬ、米麥魚菜を食ふ外無いのである。只米麥等を分析して其中に蛋白若干脂肪若干あるから米麥を若干量食ふのがよいと言ふまでゝある。蛋白脂肪は牛豚の肉、ジャガイモ、パンにもある。西洋人は實際此等を食とし日本人は米麥を食として居る所に國民的常食の相違があ

る。しかも何れにしても人體に必要なる脂肪蛋白の類は攝取して居るのであるから一般的に營養論として脂肪若干蛋白若干を取るがよいといふ論は立つので、是は米麥牛豚に拘はらず通ずるのである。たとへば右の如き所を人間敎育に就いて論ずるのが敎育學であるとすれば敎育學に國民的の相違は無いわけである。かくて敎育學が普遍的たり得るのであるが、同時に敎育學の有效範圍も自ら知れる。實際食するものは米麥牛豚であつて脂肪蛋白を飲食せざる如くに敎育學で人類國民が養はれるのではない。日本人を養ふものは米であり歐米人はパンでなければ生きぬが、敎育に於て此相違に相當するものは言ふまでもなく其國々の文化である。日本人は日本の歷史として發展して來た文化卽ち衣食住の習俗より政治經濟法律道德學問藝術宗敎に至るまでの文物制度によつて敎育せ

られ、西洋各國民は又其國々の歷史として現はれ來つた文化によつて敎育せられるので、此が敎育上の實際の食物である。固より文化は萬國相影響感化して發達するが國々の特色はどこまでも嚴然あるのである。特に文化的生活一切を發表する言語に於て此特色がよく見える。只の言語は無い、國々の國語のみがあるのである。

吾々は米で養はれ西洋人はパンで養はれる如くに、吾々は吾邦の歷史によりて敎育せられ英國人は英國の文物によつて敎育せられるので、其所に人間敎育とは國民敎育のことであるといふ意味を見るのである。醫化學、衛生學によつて米麥魚菜を如何程如何樣に攝取すべきかパン牛肉を如何程如何樣に攝取すべきかを敎へられる如くに敎育學によつて日本人も英國人も各其國民敎育の方法を學ぶのである。敎育に於ては實際吾人を養ふものは敎育學でなく我

國民の歴史的文化であるが、只其を如何に最も有效にすべきかを教育學が論ずるのである。教育は教育に於ける自己の役目を知つて他に俟つべき所は俟ち自ら任ずべき所は任じて其範圍を適當に守るべきは言ふまでもないことである。一言で言へば此等の學は形式である、此形式を嵌めるべき質料は國民の文化である。國の文學、國の歴史、國の藝術、國風國俗、又國の文化に歴史的に貢獻して今は國民の思想感情を宿どしてをる一切の典籍、凡べて此等を發表すること身の心に於ける如き關係にある國語、以上の國民的生活の暖皮肉と謂ふべきものに親しましむる機會を相當に多くすることが國民教育上最も大切であつて、而して其が卽ち人間教育になることゝ思ふ。形式の學及功利的性質の智識技能の教授に多大の力を注ぐために右の教育を不十分ならしむるは人類教育のためにならぬこと

になる。平田篤胤の言の如くに教よりも事が根本的であるが、其教の中に就いても所謂學(オロジイ)は更に一層抽象的形式的のものであつて實質を俟つて其用をなすのである。米國人を教育してをるものは其教育學であるといふよりも其教育學の背後にあつて教育學を生み且つ之を使用して居る米國的精神文物である。其平等の權利義務の政治的理想、其自主獨立の道德的精神といふ如き米國的氣魂といふべきものが隙間なく充實して米國人を圍繞し彼等の少年青年を感化してをる、是が彼等の最大の教育力でなければならぬ。此教育力を有效に働かすために教育學も生れ出たのである。若し又種々の外來思想が行はれるならば米國人も此自己特有の精神に氣が付いて之を擁護發展せしめんと努力するに至るのである。蓋し教育とはさま〴〵の觀念を注ぎ込み或は種々の技に馴れしめる

といふことが其眼目ではないと思ふ。教育は生存の道である。生存の精髄は精神である。而して生存に特色無きは無く、特色を失へば生存を失ふのであるが、生存の强烈なる所卽ち精神には猶更明かなる特色がある。教育とは此特色の存續並に其發展のことであつて、此所に生の道たる教育の眼目がなければならぬ。教育の燒點は肉體に於ける血統の存續の如く精神的血脈の相續にある。佛教徒は釋迦以來人から人に以心傳心的に此の間斷なき心法の相續を其生命とし、儒學者は千載の下孔孟の精神を體驗することを自己の身上とし、或は獨逸哲學者はあくまでカントを祖述して決してロックやミルを繼紹せんとはせぬ。苟くも一國民の教育たる以上祖先の精神を子孫後代に傳ふるが其大眼目たるべきは言を俟たぬ。其他の教科は悉く之に從屬すること恰かも主人に屬する用具の如き

ものである。

國民教育に於て今よりも一層國民的傳統に幼年少年を親ましむる方法を講せねばならぬ。國史の如きも學術的なるものゝ概略といふ如きをやめて物語傳記の類を授け、國語は最も細心に其純正を保存し〔近來「注意を拂ふ」などの文字は國語の上からは殆ど意味を成さぬ、意を注ぐことを拂ふとは無意味の語なるかと思ふ〕、且つ成るべく廣く深く國語に入らしめ、文章には今一層の力を注いで、單に用を達するまでといふ功利的の考方に偏せず國民的の感情思想を宿どすもの、國民的道德、宗教、藝術の發現として教育上重大視すべきである。祭祀儀禮は國民の生活と深い關係のあることは東西に通じて然りであるから國民教育に於ては祭祀の意味を知らしめ特に其儀禮に參らしめることが必要である。凡そ何れの國民にも其國

民的詩のないはない。國民的詩は卽ち其國民的性情の純正なる發表である。詩は言語と音樂の融合であつて最も具體的なる思想感情の渾一體である。故に其國民の詩は其國民の經である。敎育の最大力の一と詩は見るべきである。このことは考究して見れば重要なることが見出されやうと思ふ。然るに我國民的詩としては所謂和歌が其最も特色あるものであらうと思ふ。故に和歌などゝ言ふは當らぬので之を敷島の道とも言つてある。我が敷島の道卽ち國民的精神に入るには歌によるべきを示したのである。國民敎育に於て和歌は大に尊重せられ奬勵せらるべきものと思ふ。今日は功利的の學術技能の習得に忙がはしくして、爲めにかゝる國民の暖皮肉に遠ざかる憾が多い。近來少年への御伽話の如きは只徒らに異國遠鄕の珍奇なる話を耳新らしく語つて兒童を喜ばすことを力

めてをるは甚だ不可であると思ふ。此等も吾等の祖先を物語るものを繰返へして聞かすべきである、繰返へし語つて彼等の耳に熟するのでなければ敎育的效果はないので、次ぎ〳〵に耳新らしく語るは敎育上至つて忌むべきことかと思ふ。佛典漢籍は我邦文化の發展に資し其中に織り込まれてをる故大に之を學ぶと共に又近年見る如く此等の邦譯及註解が出づる如きは國民文化敎育上實に大に貢献する業であると思はれる。

二

上述身體營養に比しての論は或點以上には進めることは出來ぬ。敎育學(倫理學哲學等も同樣)は敎育の形式を示すとはいふものゝ形式は嚴密に言へば實質と離れぬから從て敎育學そのものにも實は

國民的特色はあることゝ思ふ。倫理學の如きにあつては此特色は頗る顯著であつて、只其道德的思惟內容の特色を示すのみでなく、其に順つて理論の構成の仕方そのものにも特色がある。(たとへば行爲を題目として其の心理學的要素を細かに分析する如きは英米の倫理學の一特色であるやうに思はれる)。倫理學は固より道德上の普遍的眞理を明かにせんとするが、其背後にある道德的實際生活には國々の特色があるから思惟內容にも理論構造の形式にも自然に其特色が反映せられる、又そうであつて其倫理學に生命がある。倫理學の理論組織の形が他國の倫理學のに模せられてをるは思想の未だ十分獨立せざる徵といふも可である。敎育の學に於ても多分同樣に考へることが出來る。果して然らば一方に國民敎育があると共に一方に國民的敎育學が發達すべきである。現に各國の敎育

の學にはそれ〴〵國の特色があることゝ思ふ。文化的生活そのものが國民的歷史的である以上諸種の學術は其文化の產物であり文化そのものゝ內容であるから特色のあるのが當然である。

於是上に人間敎育と國民敎育と異か同かの論を暫く措いたのであるが、往々人としての敎育といふ論があるなれど、一般的文化のない以上人を敎育するものは國々の文化の外は無いから、國民敎育の外に人間の敎育といふものはない、人間としての敎育といふのも國民敎育の裡に自らあるのでなければならぬ。既に敎育の最大要具である言語が國民的であつて、其は國民的感情思想と其生命を共にするものである以上、敎育が言語を介して行はれることだけ考へても人類敎育は國民敎育であつて其は又實に國語敎育である。人間は實に其祖國の語を通じて人間性を實にするのである。

科學に屬する智識並に其應用の技術の如きには言語上の特色は比較的稀薄に見える。從て現代教育の內容の多量の部分を占めてをる科學的智識及諸種の技術には國民的特色が薄く、教育が世界一般的のものであると思はしめる一原因となつてをるかも知れぬ。事實として科學的性質の教科は多くは一般の人類生活に共通であつて、大體生活に利する性質のものである。科學的の智術は利用の道に貢献する。然るに是は道德とか愛とか人道とかいふものが之を利用するから利用卽厚生的となるので、科學は自ら人生の主人となることは出來ぬ。利用的が必ずしも厚生的ではない。戰爭に利用せられた科學は恐しく破壞的である。今日教育に科學的教養が重きをなす一の理由は國際的競爭の激しいことにあるかと思ふ。然るに此競爭に於て有功者たらんために科學的教養を與す主人は

科學自身ではなく、國民的自衛心とか愛國心とかである、其惡しき場合では國民的野心、競爭心である。然らば國力を强くするためといふ意味の科學的教養を與す其同じ主意によつて國家的精神を養ふことも大に盡力せねば自家撞着である。實際此兩方面に等しく大に力を注いでをるのが世界各國の教育の現狀であるかと思ふ。而して其の如くせしむるものは國際的競爭である。若し物力的競爭の心を息めて道德的に萬國が交際する氣運に向つたならば、今日の如くに國の物質力を强くするために教育の仕事の內容の大半を之に割くことを止めて、眞個人間性の開發實現に從事することが出來、生物的生存競爭に疲れずして人間らしき生を一層よく樂むことが出來るわけである。此故に正義人道が萬國に行はれるには固より道德が盛んであるべく、又國際的競爭を行ふにも國民の物質力の外

に道德力が必要であるから、いづれにしても廣義の道德敎育を盛んにせねば利用的性質の敎科を大に起しても敎育の本意に背く。正義人道の流行は理想であるが、現實としては國際競爭が盛んであるから物質力を强くするために科學的敎科を大に起すと同時に道德力を養ふことにも等しく大に盡力せねばならぬ。戰後敎育の一方針として英國の敎育當局者は古典の普及を計畫して居るとのことなるが其意のある所見るべきである。

科學的敎養は悉く利用的であるとは言はれまいが科學は元來機械の心を專らとするものである、從て性情の特色を語る國語とは緣が比較的に薄い。併し科學の發達にも國民的特色はあるべきである。數學にも國民的特色があるといふことである。其れ々々國民的特色を帶びて發達するから數學科學も眞に發達する。佛蘭西數

學は佛蘭西獨特の趣きを具して國民的文化の裡に發し來つたから世界の數學界によく貢献したのであらう。單に他國民の發達せしめた學術を受取るに甘んせずして進んで人類の學術に貢献せんとするには此等の學問に於ても自ら國民的色彩が顯はれて來ることゝ想像せられる。

博愛人道は世界的であつて國民的でないかのやうに見えるかも知れぬが、宗敎道德的生活はいよ〳〵特殊的と爲るのが其常であるから國民的敎養を通じてでなければ博愛人道も具體的眞理とはならぬ。國風國體と兩立しないやうな博愛人道は其事自身が既に眞の人道博愛に背いてをるので、かゝる人道博愛は速かに斥けたい、最も忌むべきものである。宗敎は人道博愛を說くが、言語性は宗敎の一面である、其宗敎には獨特の言語があつて其生命を維持し發現し

てをる。而して國民的ならぬ言語が無いから國民的ならぬ宗教もない。眞に生命ある宗教は人々個々獨自的であつて、其は當人の國語を通じて、しかも其人獨特の色彩を帶びたる言語として發表せられざるを得ぬ。キリスト教の經典が歐洲諸國民の言語に翻譯せられて其國々特色ある宗教となつたことゝ思ふ。ルーテルのバイブル翻譯は正さに獨逸に一新宗教を興したものとも言へるではなからうか。或る人の言へる如く若しバイブルが漢文的に翻譯せられたのであつたならキリスト教は一層速かに廣く我邦に行はれたであるかも知れぬ。試みに神の示現といふを上帝の道とか天道とか神明とか言つたならば儒教的教養を受けた人々の心を動かすことが易いとも思はれる、而してキリスト教が我が在來の文化と早く合體することが出來たかと思はれる。猶太の神話に據つたり、西洋の

風習に結びつけたり、西洋人風の口調で說いては入りにくいかと思ふ。只此等異俗異風の裡に宿どる普遍的の眞が人を動かすのであらう。而して普遍的の眞に動かされた人は此自己の宗教を必ずや自己獨特の國語によつて發表する。其國語は其祖先の思想感情を反響し其歷史の遺音を傳へるのである。執拗的狂熱的半機械的信仰は國民的傳統に背いて一部分の人を把捉することはあつても、國民を大に動かすほどの宗教となるには如何なる外來の宗教も其國民の性情其國民の文物全體と合體する所が出來ねばならぬこゝと思ふ。從て國民的道德と背馳する所ある如き人道博愛說又は宗教は未だ眞に具體的の力を實現せざるものと言ふべきである。凡そ吾人の生活の少なからざる部分に抽象的寄生的なるものが附着して勢力を有つて居る所から生活の諸方面の間、自他の間に齟齬矛盾

が多いのであらう。眞に具體的となるは眞に人が一個人となるので、眞に一個人となるは眞に一國民となるのであり、眞に一國民となるのは眞に四海同胞の心を抱くことになるのであると考へざるを得ない。さなくば造化も無意味であるやうに思ふ。故に國民教育の外に人間としての教育を吾人は信じたくない。

一〇、現代と老子の柔の教

社會の生活は何時代でも其が生活であることから內容あるもの積極的のものでなければ生活は無いのであるが、只積極的ばかりといふは無限のみにあることであらうから、吾人の生活の如き有限なものでは積極的の裏には必ず消極的といふことがあるので、現にこれは世の中の萬事萬物につけて吾々が日々言ふこと又行ふことである。消極的のない積極的といふことは裏のない表といふ類であるが、しかし時の勢で吾々は表面の積極的のみに走り消極的を忘れ勝ちになる。特に所謂文明が發達して生活の內容が豐富複雜になると此弊に知らず〳〵陷るのは人として免れ難い所である。現代

は至る所に此積極的とか發展とかいふことを聞くので、養生攝生の人ですら兎角斯樣なものを食ふがよい斯樣な滋養物があるといふ風に取り入れそれで身體が健かになる方法のみを講じて居るかのやうに思はれるほど積極論が強い。食ふなとか減すとか抑へるとかいふことは餘り聞かぬ。しかし一方に取り入れて生を養ふ道があれば他の一方に減損して同じく生を養ふ方法もなくてならぬ道理である。これは植木などの栽培の仕方を見ても分かることである。消極的に踏み止まることがなくして進んでばかりといふことは不可能なことで、無理をすれば顚覆する外は無い。膨脹の仕通しといふことはあり得ぬことで必ず節減を餘儀なくせらるる時節が來る。しかし仕過ぎて又後戻りするといふは宜しきを得たものとは言はれぬ、失敗といふ外無からう。支那の昔時周の代は盛んなる

文明を發し從て生活の內容が豐富活潑になつたことと想像せられるが、段々所謂爛熟といふことになり、諸侯の國々は互に相爭い、又各國の內では諸人大に競ふやうになつた。つまり生活の內容といふことは概括して言へば智識と富と權力と名とである。此等のものを國々人々爭い取らうとするのである。此等の內容が發展するにつれて其整理が容易ならぬことになつた。其整理の仕事に當るものは仁義道德或は禮樂刑政といふものであるが、其等の道德とか法とかいふもので制しきれないやうになつたと見える。しかし元來內容を競ふから仁義や法も喧敷なつたので、知や富を左程尊いものに思いさへせねば仁義や法も左程八釜敷言ふ必要もなかつたのであらう。それを八釜敷言ふ必要が起つたのは既にやり過ごしたからである。それで老子は聖人の禮樂とか仁義とかいふことよりも

つと根本的に這入つて無事長久の安樂世界を說示したのが其陰柔の敎であつて卽ち消極的の行き方を示したものと思はれる。多分老子も仁義道德そのものを排斥し聖人をけなしたのではあるまいが弊を救ふには他の極端を示す必要を感じたこともあらうかと思はれる。但し勿論老子の柔の敎は右の如く只五寸右に偏つたものを眞中に戻どすには左の方に一尺引き戻どすといふ方便說ばかりでなく、其說く所自身に眞理は自らあるに相違ない。現代の文明は歐米の產業的文明に最も强く影響せられてをると思はれるが、此文明の大なる特色は科學智と富を其基本とする所にある。特に最近の傾向は從來一般に人が求めるものゝ一つである名譽面目の如きには餘程無頓着になり、又權力の欲望は强からうが其は今日は富と形影相伴ふ如き狀態になつたから富力あるものに權力がつき廻は

る故、其結果今日世界を司配する最大の力は富といふべきと思はれる。科學智を重寶がるのは主として其れが富を作る手段となるからである。其外科學智は吾人に百般の便宜を敎へ示すのである。それでつまり智を重寶がり富を尊ぶのは一方人に勝つといふことと一方自ら享樂するといふこと、此二つを現代は大に求めて居るといふことになる、勝心と享樂欲が最も盛んである。今古の歷史に於て一番今日これが盛んであるかは知らぬが兎に角餘程盛んである。斯樣なことがいよ〳〵甚しくなれば人生を破壞するに至るであらうし、さなくとも人生を不幸ならしめる。これは人生を幸福ならしめる道としても賢明なることでは無い。然るに是を整理する方法は消極的の外は無い。消極を忘れた積極は躓くのは必至の勢である。此消極的の道は西洋では宗敎であり、理想主義であらうと思は